装甲護神　影継

桑名　村正

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
装甲護神　影継

【Ｎコード】
Ｎ５７０４Ｚ

【作者名】
桑名　村正

【あらすじ】
男は剱甲（つるぎ）と呼ばれる装甲を身に纏い、戦場を駆け抜ける武人（ぶじん）である。
女は神技（しんぎ）と呼ばれる能力を身に付け、武人を助ける神樂（かぐら）である。
主人公・五十嵐要は、武人・神樂を目指す生徒の通う天領学園で唯一剱甲を扱えない少年だったが、一つの出会いが彼の行く末を大きく変える。
学園で出会う、様々な少年少女。
敵対する、多種多様な人物。

それらを乗り越え、彼は何を護りきるのか。
純正統派装甲・超能力殺陣―解禁―

話題の『無能』編入生（前書き）

新年明けましておめでとう御座います。
今回一転して『自分が書きたかったもの』を掲載させていただきます。長編になるか短編になるかは分かりませんが、少しでもお楽しみ頂ければ幸いです。

話題の『無能』編入生

真っ直ぐに続いている廊下を一人の少年が歩いていると、会話をしながら歩いている女子とすれ違う際に女子の腕と少年の胸がぶつかった。

「きゃっ！」

「おっと…」

少年は避けるように身を翻したのだが壁際を歩いていたことが失敗だった。避けるためのスペースは精々三十センチほど。余所見をし、ふらつきながら歩く女子を避けるには不十分だったのだ。

「……失礼しました、怪我などは…」

ぶつかった女子を気遣うように声をかけ、手を差し伸べようとしたが、それを遮るように友人であろう一緒に歩いていた女子が少年の手を叩いた。

叩かれた少年の手はベクトルを変えて宙へと浮いた。

行き場の失った手を一瞬視線で追い、どうしようかと考えつつも、少年は自分の手を叩いた女子とぶつかった女子へと再び視線を戻した。

「紫亜（しあ）に何をしようとしたの！」

手を叩いた女子は警戒を露わにした表情で鋭く少年を威嚇しながらも、紫亜と呼ばれた少女を少年から遠ざけようと、徐々に合間を取っていた。

「いえ…自分の所為で何かあっては申し訳ないと思いまして…」

「……か、可怜（かれん）ちゃん…」

怯えた様子で、紫亜であろう女子は、素早く可怜の背に隠れてしまった。

怯えている紫亜女子を優しい手つきで宥めながらも、可怜女子は少年を睨んでいた。

「あんた、確か五組に転入してきた五十嵐要（いがらしかなめ）…だったわよね？」

「…そのとおり、ですが？」
その答えと同時に可怜女子は更に険しい表情で要を睨んだ。
対して要は諦めにも似た溜め息を吐きながら顔を押さえた。
同年代に睨まれるような事を彼は一切していないのだが、如何せん彼の持つ事情がここ・大和国立天領学園での彼の立場を最悪の状態にしているのだ。
「だったら話は早いわ。あんたみたいなのがこの学園に居ること自体可笑しなことなのに、何を平然としてその面をぶら下げて廊下を歩いているのかしら？」
「…その理屈だとアンジェを含む清掃業者の方々や警備の方々も学園散策をしていることを否定する事になりますが……」
「ぐっ！？」
要が悪気を一切持たずに反論すると、可怜は失言に気付いたように呻いた。
同時に可怜の反応を見た要は相手を怒らせるような発言をしてしまったことに後悔をし、弁明しようと口を開こうとすると、先に可怜が声を上げた。
「う、うるさい！　そういう人たちは別として…あんたのような何の役にも立たなさそうな奴が堂々と歩き回っているんじゃないわよ！」
「…一応自分は邪魔にならないよう端を歩いていたのですが…」
「なら教室に引っ込んでいなさい！　なんだったら学園に来なくても充分よ！　むしろ学園に来ない方が清々するわ！」
「……」
要は何を言っても無駄だと判断したのだろうか、固く口を閉ざしてしまった。
「佐々木の推薦だかなんだか知らないけど、それならそれに相応しい実力を見せなさいよ！　あんたは…！」
暴言を吐き続けていたためか、周囲に人が集まり始めていることに気付かず、可怜はその言葉を吐いた。

「男のくせに釼甲(つるぎ)を扱えない無能でしょう！」

…周囲のざわつきが目立ち始めた。

可怜の言葉を聞き取った野次馬たちはたちまち五十嵐要に陰口を叩いた。

「あいつが話題の無能か…？」

「そうだ…甲竜(こうりゅう)すら扱えないっていう…」

「嘘でしょう？　そんな男が何でこの学園に？」

「だから佐々木先生のコネじゃないの？」

「そういえば実際に装甲練習をしたとき、一人だけ反応がなかったな…」

小声で囁きあっているようだが、全て要の耳に届いていた。事実であるが故に否定することもできず、要は貝のように押し黙ったままその場に立っていた。

ただ、その表情に怒りなどの激情は見られなかった。

ひどく落ち着いた、全ての暴言を受け入れている様子だった。

対して少女は留まることを知らず、罵声を浴びせた。

「さっさとこの学園から消えなさい、役たたず！　さもないと…！」

周囲が自分に味方していることで気が大きくなったのか、可怜はその拳を要の眼前へと突き出した。拳と目の間は十数センチしかなく、もう一歩踏み込めばぶつかるであろう距離だった。

「私の炎で、あんたを更に役たたずにしてやる！」

可怜のその言葉と共に、拳に炎が纏い始めた。

ただその炎が彼女の手を焼くことなどはなく、要の前髪だけが熱で焦げていった。

避けようにも壁際に追い詰められ、左右は野次馬のせいで埋めつくされているために逃げることは出来ない。

紫亜と呼ばれた少女はこの状況に怯え、既に人ごみをかき分け廊下から立ち去っていた。

「…出来れば穏便に見逃してはいただけないでしょうか？」
さすがに眼前の炎の熱には完全に耐え切れないのか、要は瞬きの回数を増やしながらも動じることなく、不気味なほど落ち着いた様子で話しかけていた。
一歩間違えれば火傷…それどころか失明する危険性もあるにも関わらず、毅然とした態度で臨む要の態度が更に可怜の毛を逆立てた。
「ふん！　穀潰しのろくでなしが偉そうに…なら人に物を頼む時にはどうすれば良いか、くらいは知っているわよね？」
「……」
可怜がそう言うと、要は炎を避けるように勢い良く拳の下に潜り込んだ。
「！？」
何かしらの反撃が来ると思ったのか、可怜は二歩引いて要との間合いを取った。
だが、彼女の視界に映ったのは予想外のものだった。
「……」
「……な、何の真似？」
「土下座です」
それは要の言う通り、見事なまでの土下座だった。
惜しげもなく自身の額を床に擦りつけ、左右対称の姿勢は見事なまでの美しさだった。それがこの場を凌ぐためのものではなければの話だが。
「出来ればこれで見逃していただければ幸いです」
「……」
拍子抜けたのか、しばらくの沈黙が辺りを包んだ。
だがそれもすぐに罵声と嘲笑によって吹き飛ばされた。
「あはははは！　悪いわね！　無能でもそんなことが出来るとは思わなかったわ！」
口火を切ったのは当然というべきだろうか、当事者である可怜だった。

それに釣られるように、周囲も思い思いの言葉を口にし始める。
「なんだよ。いくら神樂とはいえ、女一人に立ち向かえない男って…！」
「やっぱり噂は本当だったんじゃないの？」
「そんな奴が俺らと机を並べてんのかよ…気分わりぃ…」
「……」
頭を下げている要はそれだけの罵詈雑言を浴びてもなお黙り続けていた。
尋常ではない忍耐力を目の前にしながらも、それを理解できないものはひたすらに彼を罵っていた。
その典型が、恐らくこの騒ぎの張本人である可怜だろう。下げられた頭に対して容赦無くその足で踏みつけた。
コンクリートと骨のぶつかる鈍い音が響いた。
それでも、要は身じろぎどころか声の一つも上げなかった。
黙っているのを良いことに、可怜はひたすらに暴力を振るい続けた。
その場にいる誰もが、要に手を差し伸べようとはしなかった。
「ほら、もっと頭を下げられるわよね！？　やってみなさ…」
「騒ぎの現場はここですね。失礼しますよ？」
暴力がエスカレートしていた所に響いた声によって、可怜は反射的に飛び退いていた。声のした方向に可怜と野次馬が視線を向ければ、彼らの予想通りの人間がそこに居た。
ゆっくり歩み寄ってくるその男の姿は、後ろめたい気持ちがある生徒にとっては恐怖の対象でしかなかった。
「さ、佐々木……先生！？」
さすがの本人を前にして敬称なしで呼ぶことはまずいと判断したのだろう、可怜は取ってつけたように先生などと呼んだが、そこには畏敬の念は一片たりとも混じっていなかった。
それを察したのか、佐々木と呼ばれた教師は少しだけ笑顔を崩し、眉をひそめたがそれも一瞬のこと。すぐに元の笑顔を浮かべて口を

開いた。
「何やら無抵抗な男子に対して暴力を振るっている、という匿名の通報があったので来てみましたが…何事もなかったようですね？」
見回す佐々木の視線に対して真っ直ぐに見つめ返す者はおらず、全員が全員目を背けた。
だが、咎め無しと思った全員は、次の言葉で戦慄することとなった。
「余所見しながらぶつかったにも関わらず避けた方に因縁を付けて挙句の果てには公衆の面前で罵詈雑言に誹謗中傷を浴びせ、武人の誇りを汚すような暴挙…野次馬の中には誰一人として正しき人…加えて恥も覚悟の上で謝罪をしている人を庇おうとはしない…そんなことがあるはずないですよね？　飯島可怜（いいじま）さんに皆さん？」
全てを見ていたかのように語る教師に、その場に居た全員は罰を覚悟した。
見回す教師の視線は、彼らにとっては槍を突きつけられているような錯覚に陥らせた。
露骨な…それでいて静かな怒りを見せながらも、佐々木は相も変わらない笑顔のままでいた。
「これから三十秒の時間を与えます。罰を受けたい人は残ってください。それ以外の方は早急に教室に戻ることをお勧めします」
その言葉と同時に、生徒たちは蜘蛛の子を散らすように逃げていった。
三十秒後。その場に残されたのは、佐々木教諭と未だに土下座中の要だった。
「……まだやっていたのか？」
人気がなくなると、佐々木は言葉を少し粗くした。
こちらの方が素であり、その正体を知るのは学園内でも十人いるか居ないかである。飯島が話していたとおり、佐々木が要をこの学園に推薦した張本人である。
それ以前の付き合いは全くの謎に包まれているが、これらのやり

とりからそれなりの親しい関係であることは誰の目に見ても明らかだが、それを見たことのある人間がほとんどいないため、周囲の認識は精々『自分の発掘した人材に甘い』程度である。
「…自分は問題の一端を担っていると判断したので…厳罰に処される覚悟は出来ています」
「それだけの覚悟が他の学生が出来るようになれば万々歳なんだがな…」
心底残念そうにため息をつきながら佐々木は天井を仰いだ。
「だ、大丈夫でございましたか？！　お怪我などはありませんでしょうか！」
「要！　あの程度の女子相手に頭を下げるとは何事だ！」
騒ぎが治まってからおよそ二分後、二つの足音が廊下に響き渡った。
音のした方向へと二人が視線を向けると、二人の少女がこちらに向かって走っていた。
一人は真っ直ぐな黒髪が腰に届きそうなほど長く紅い簪（かんざし）を差し、神樂学科独特の白い制服とのコントラストが美しかった。どこか怒りを持っているような表情を浮かべ、素早く駆けていた。
もう一人は銀色の髪を左右だけを長く伸ばしたショートカットの少女で、非常に慌てた表情をしていた。こちらの少女の特徴は何といっても学園指定の制服に身を包んでおらず、代わりとして何故かメイド服を纏っていた。
二人とも方向性は違えど、まごう事なく美人に分類されるであろう出で立ちをしていた。
黒髪制服の少女は凛とした雰囲気を纏い、スラリ伸びた…そして女性の部分は、出るところは出ている体を真っ直ぐに伸ばしていた。何らかのモデルだと言われても百人中九十八人は疑問に思うことなく納得するだろう。
対してメイド服の少女はどちらかと言えば童顔で、制服の少女と比べれば一つ二つ違って見える。ただ、服の上からでも分かる、か

なり女性的な凹凸を持った体だった。
「…椛(もみじ)とアンジェか…大丈夫だ、特に支障が出るような外傷は無い」
「そ、それは良うございました！　要さんにあれ以上の被害があってはいけないと思いまして、佐々木先生へとお伝えさせていただきました！」
「なるほど、騒ぎが起こってから佐々木教諭が到着するまでの時間が異様に短かったのはアンジェのおかげか…助かった」
「そういうことです。要君は真白(ましろ)さんにお礼でも言っておいたほうが…」
　椛とアンジェが現れるとすぐに口調を変えた、佐々木の豹変ぶりに呆れながらも、要はアンジェに頭を下げようとする。が、それを礼を言おうとした相手に止められた。
「いえいえ、神樂でもないアンジェが出来ることと言えばそれぐらいなので…」
　恥ずかしそうにはにかみながらアンジェは両手を合わせた。自分が何かしらの役に立ったことが嬉しかったのだろう。
「けれど、あの程度の生徒ならば五十嵐でも追い払うことが出来たのではないか？」
　ゆっくりと立ち上がる要を見ながら、椛は言った。
　膝についた汚れを落とそうとするとすかさずアンジェがかがみこんでズボンを叩いた。
　それまでに確認などを一切取られなかったので、仕方なく甘んじることにしたようだ。
「可能と言えば可能だが…その場合の被害は恐らく今より遥かに大きいだろうな。こちらからは一切手を出していないから、少なくとも退学は免れるだろう」
「そんなはずはない！　現にこの学園に入学してから二ヶ月になるが学園・神樂・武人問わず小競り合いは頻繁に見かけた！」
「ひゃいっ！？」
　要の言葉を言い訳だと思ったのだろう、椛と呼ばれた少女は声を

張り上げた。突然の大声にかがんでいたアンジェは驚きのあまりに飛び上がった。
だがそんなことを一切気にすることなく、椛は続ける。
「他の学生の迷惑も考えずにその場で決闘を始めたり、騒動を起こしているのにも関わらず彼ら彼女らには大きな処罰はくだされない…ならば五十嵐も正当防衛をしても何ら問題は無いはずだろう！」
今まで溜まっていた怒りをぶちまけるように、椛は叫んだ。
「……だが穏便で尚且つ確実な手段があれしか思い浮かばなかったんだ」
「だから易易と頭を下げたのか？　自身の誇りを捨ててまで…」
「そうだ」
熱くなった椛に対して、要は達観しているというべきか、諦めなのかは分からないが、非常に落ち着いた様子だった。
「……クッ…！」
一瞬だけ、椛は悔しそうに歯を食いしばりながら要を見上げたが、すぐに振り返ってその場を立ち去ろうとした。
さすがに何かが不味いと判断したのか、椛を呼び止めようと要は声をかけようとした。
「……椛」
「腰抜けが名前を呼ぶな」
だが、返ってきたのは拒絶の言葉だった。
「……」
その反応に何か思うことがあったのか、要は三秒ほど黙り込んだが、すぐに口を開いた。
「失礼致しました、二ノ宮（にのみや）さん。身分不相応の身でありながらも名を呼ぶなどという烏滸（おこ）がましい真似をして申し訳ありませんでした」
「……～～～～！」
突如としてよそよそしくなった要の返事に堪らず椛は振り返りそうになったが、辛うじて踏み留まった。
声にならない声を上げながら、振り返らずに要たちを背にしてそ

の場から去っていった。
　そんな彼女の背を見送りながら、要は顎に手を当てて考え込んでいた。
「…相変わらずもみ…いや、二ノ宮の対応が冷たいと思うのだが…」
「折角この学園で五年ぶりの再会をした幼馴染だというのに…アンジェは少々勿体無いお話ではないかと思います…」
「…その時までの彼女はどういった感じに接してきたのですか？」
　疑問に思った佐々木は遠慮を一切せずに問いかけてきた。
「兄と妹…といったところだろうか…？　といっても一緒に過ごしていたのは三年程度だから実際の兄妹とはかけ離れたコミュニケーションをとっていたな…」
「宜しければどのような事が有ったかをお話していただけないでしょうか？　アンジェはそのような友人が少なかったので興味津々でございます！」
　その言葉通りアンジェは目を輝かせて要を見た。
　これほどまでに人懐っこい性格をしながらも友人が少なかった、という事実は少し要の何かに引っかかったが、時間のことを思い出して手を振った。
「まぁそれくらいなら全然構わないが…時間が…」
「話すのは構いませんが要くんは授業に遅れないように注意してくださいね？　五組の一限は私の釼甲基礎理論ですから…」
「…というわけだ。その話は時間があったときにでも頼む」
「かしこまりました！　それではアンジェは校内掃除へと戻ります！」
「あぁ、頑張ってくれ」
「はい！　要さんも勉学にお励みになってくださいませ！」
　そう言ってアンジェは深くおじぎをしてから椛とは反対の方向へ颯爽と走っていった。
　残された二人は並んで教室へと歩き始めた。

剱甲と神樂

「それではまず先週の復習から始めたいと思います。教科書は仕舞ってノートだけを出してください。あぁ、以前話していた通り手書きのメモであればそれを見るのも許可します」

佐々木傭兵教諭の言葉を聞いて、教室内にいる生徒のほとんどが不満げな声を上げた。

教室内では自分は出来ないなどの無意味なアピールを繰り広げあっていた。この辺は普通の学園と大差が無い。

基本、講義は共通履修科目のため神樂科の女子と武人科の男子が合同で講義を受けることになっている。日頃大した接点もないために、互いが互いに自分の存在をこれみよがしにアピールし合っている。

しかしその中で、特に目立った反応を示さなかった生徒が二人いた。

五十嵐要と二ノ宮椛。

実を言えば普段通りなのだが、この二人だけは教室の空気に全く馴染もうとしない。さらにどのような運命の悪戯があったのか分からないが、二人は席が隣同士なのだ。

そのためその席の周辺だけは他に比べて声が抑え気味だ。

加えて先の（一方的な）喧嘩も有ったために場の空気はいつも以上に重かった。

「お～い、要…」

そんな空気に全く臆することなく、要の左隣に座っていた男が話しかけた。

声のした方向には短髪を逆立てたような、イメージとしては獅子の鬣を思い浮かべるような髪型をした男が話しかけてきていた。

申し訳無さそうに合掌しながら頭を軽く下げていた。

ある程度話の内容は予想できていたようで、分かった顔をしなが

らも要はため息混じりに答えた。
「…何か忘れ物でもしたのか？」
「その通り。悪いがノートとメモ用紙…あとなんでも良いから筆記用具を貸してくれるか？」
「多いな」
「獅童（しどう）…入学してからこれで何回目だ？」
話に聞き耳を立てていたのか、椛が要を間に挟んで問い掛けた。
「週に二回だから…これで九回目か」
「数えている余裕があれば改善するように努力をしろ」
呆れたように言葉を吐く椛に対して獅童はおどけたように手を広げた。
「努力はしているが、改善されていないだけだ」
「折角教育用記憶媒体があるのだからそれを利用すれば…」
「アナログ人間舐めるなよ？　そんな物、入学して三日で破損したぜ」
「胸を張って言うべきことか！　そして壊れたのならばさっさと修繕申請をするべきだろう！」
「使わないもののために手間暇をかけるような性格はしてないんでね」
悪びれもせず獅童は誇らしげに語った。その態度に苛立ちを覚えた椛は無意識的に席を立ち上がろうとしていた。
「どうでも良いのですが、人を挟んで口論をヒートアップさせるのは勘弁して頂きたい。何でしたら今すぐ自分と龍一の席を代わりますので、心ゆくまで二人で楽しんでください。佐々木教諭に見つかった場合は一切責任を取りませんが」
「うっ…！」
しかし二人の騒がしいやり取りに我慢しきれなかったのか、今朝方変えた他人行儀な態度で要は椛にそう言った。
これには椛も反論することができず、大人しく乗り出しかけた身を落とした。

対して獅童龍一はそんな椛の反応を見て楽しそうに小さく笑っていた。
そんな二人の様子に頭を押さえながら要はカバンの中から頼まれたものを全て出した。
大分使い古されたようなノートにページの所々が切り取られているメモ張、そして今時珍しいＨＢの鉛筆だった。
「これで大丈夫か」
「どうも。やっぱり実際に手に感触が残るというのが手書きの良さだよな？」
「しかし龍一ほどの頭脳があれば俺のノート無しでも充分抜き打ちに対応できるだろう？」
「そうでもないさ。佐々木教諭は授業中の雑談すら試験内容に出す、それを全部記入しているから、というのもあるが何といっても解りやすいからな」
「学年一位が何を言っている」
「いや、冗談抜きで…しかし一ヶ月で大分くたびれた上、既に残りページが五十枚ノートの内五って…それだけアンジェちゃんだったっけ？　は頑張っているのか？」
「あぁ、教える側としてはあれだけのやる気を見せられればこちらもその努力に答えなければと思うほどだ」
「ほ～～…」
感心したように声を上げながら龍一はノートをざっと見ていた。
「しかし、それだけ熱心なのにノートはお前持ちなのか？」
「そのほうが仕事に集中できるからだそうだ。『自分で持っていては仕事をそっちのけで読み込んでしまう』かもしれない、と」
「成程、納得」
互いにそんな場面を想像できてしまったのか、二人は抑えた笑いをした。
「…と、ここか。というより既に次回以降の分も書いてあるのか…」
話しているうちに目的のページが見つかったのか、龍一は机の上

にノートを大きく広げて置いた。
　要も授業用のノートを広げて教壇の方へと視線を向けた。龍一に渡したものは授業用ノートを要流に（他の人向けに）まとめ直したものだ。
　そのため彼の持ち物は他の人より何倍も多い。極論を言ってしまえば先程椛の言った教育用記憶媒体を持ち運びすればカバンすら必要ない。大半の生徒は媒体を使用しているので、毎日大きめのカバンを持ち運びしている要は『無能』の件を別にしても学園の中で浮いた存在だった。
　この媒体は学園生用に個人個人に合わせて繊細な調整や配列の変更などが必要になってしまう。セキュリティ面に置いては盗難の心配などは一切ないが、代わりに全てがオリジナルという大量生産性が全くと言っていいほど無い。
　要の場合は突然の転入だったために媒体の製造が間に合わず、このような時代遅れな方法でしか講義の内容を記録できない、という事情があった。
　と言っても、要も龍一同様アナログ派であるため、製造が追いつかなった記録媒体を（幸い企画の段階だったので大きな被害は出なかった）断った。
「それではまず釼甲について…これはあえて神樂科の方に聞いてみましょうか」
　予想外の質問対象に女子の方からは軽い不満の声が上がったが、反論しても覆ることは無いと判断したのだろうか、すぐに静かになった。
　佐々木は一同を見回して誰を当てようかと考える。
　そして運が良いのか悪いのか、目のあった女子へと声をかけた。
「それでは飯島さん。釼甲…いや君の場合はブレイドアーツと言った方が良いでしょうか…これの特徴を知っている限りで良いので、挙げてみてください」
「は、はい！？」

いきなりの指名に素頓狂な声を上げながら、先程要に暴言を吐いた女子が勢い良く立ち上がった。
「え、えーと…釼甲は現在この世界における最大の装備で…そ、装甲することによってその男性の戦闘力を大幅に上げることのできる鎧…です…？」
「最後が疑問形なのはあえて無視します…補足すれば釼甲を持つ人間は自然治癒においても優れるようになります…それでは、その装甲する人間は総称して何と呼ぶかは？」
「…武人です」
「正解です。座って大丈夫ですよ」
佐々木がそう言うとすかさず飯島は腰を下ろした。同時に胸をなで下ろした。隣では紫亜が深く息を吐いた彼女を労っていた。
「それではもう少し詳しい内容を尋ねたいので…二ノ宮さん、知っている限りで良いのでお願いできますか？」
「分かりました」
飯島可怜とは全くの対照的に、指名された二ノ宮椛は堂々とした態度で立ち上がった。
場の雰囲気に呑まれるような様子は一切なく、むしろ彼女が立ち上がったことによって塗り替えられるような感覚にでも襲われる。
「釼甲は各国によってその特徴が顕著で、この大和において言えば銃火器が主流となった現在でさえも和刀（わとう）を装備した釼甲がほとんどです…使われないことがほとんどではありますが…」
「…ふむ」
「最大の特徴はこれが『男性』にしか扱えない、ということです。更に全身装甲できる人間は珍しく、適性があれば最優先でこの学園への入学が確約されます」
身に覚えのある生徒もいるためか、小さくではあるが自身がいつごろ適性が判明したかの雑談が生じた。
だがそれもすぐに佐々木の咳払いによって再び沈黙した。
「それでは、何故そのような優れた点を持ちながらも男尊女卑の世

界になっていないことについては…大谷くん、お願いします」
「すいません、先週は講義中ずっと寝ていました！」
「はい、潔くてよろしい。褒美といってはなんですが小校庭を十周してきてください」
満面の笑みを浮かべながらも背後には阿修羅の気迫を見せつけながら佐々木は言った。
さすがに教師でかつ武人であるこの男に不満不平を言う勇気は無かったのか、大谷は命令と同時に教室から勢い良く飛び出していった。
「…講義内容を聞いていなくても少し考えればすぐにわかる常識問題だったのですが…まぁ放っておきますか」
「……相変わらず容赦ないな、教諭は…確か小校庭って…」
「一周八百メートルだったな。十周だから八キロか」
「決闘場外周でないだけましか…百キロ以上は昼までに走り終わらないだろうからな…」
「それでは気を取り直して…そこで話している獅童くん」
「諒解」
ここで学年一位の男が指名されたことによって教室内は少しの喧騒に覆われた。
入学時の試験では天領学園創設以来の最高点を叩き出し、更には実践形式の試験では唯一試験官を気絶させた男だった。試験官も全員、大和の防衛軍事組織『大和国衛軍』に軍兵として所属した事のある人間であるにも関わらず、実践試験開始二分で完膚なきまでに、それも文句無しになるまで叩きのめしたのだった。
文武両道を体現させたような男で、そのことを鼻に掛ける訳でもなく、人当たりも良いので学年内では全生徒に信頼が置かれていた。
…五十嵐要が編入するまでは。
要の編入以降、突如として彼は『無能』である要と親しく接するようになり、それまでの交友関係をほぼ全て叩き壊すかの様に他の生徒との付き合いを絶った。

何が原因であるかは、一切知られていない。
それこそ一時期は『脅迫』などの噂が上がっていたが、龍一が要に接するときの態度は、今まで誰にも見せたことが無いほど明るく自然であり、それまでの表情は全て偽りだったと疑ってしまうほどの物だった。
堂々とした態度のまま、龍一は返答を始めた。
「男性は剱甲を装甲出来ることに対して、女性は『神技(しんぎ)』を扱える、ということです」
「続けてください」
「男性は練造(れんぞう)もしくは鋳造(ちゅうぞう)した…前者を業物(わざもの)、後者を数物(かずもの)と呼ぶ剱甲を装甲することが出来るようになって始めて武人・仕手と成り得るのに対して、女性は先天的もしくは後天的に超常的な現象を操作できる『神技』を身に付けています。加えて武人は剱甲なしではただの人であることに対し、神樂は自身の制御の下自由に神技を扱える…これが理由です」
「それでは、神技を扱える女性のことを総称して何と呼ぶかは？」
「『神樂(かぐら)』です」
「よろしい。座って良いですよ」
佐々木の許可を得ると龍一は要に感謝の意を表しながら座った。
要は大して気にしない様子で自分のノートで前回の授業の復習をしていた。
「それでは復習はこの程度にして次の範囲へと進みます。今回は剱甲と神樂について話していこうと思っています…ではスクリーンに注目してください」
言葉に従うと画面に大きな画像が映し出された。
そこには武人科の生徒にとってはある程度見慣れたものが複数の形態で映っていた。
「知っている人も多いとは思いますが、今映し出されているものは現在大和国衛軍の主流剱甲である丙竜(へいりゅう)の戦闘形態と自律形態です」
画面右側には人の形をした装甲が、左側には鋼で出来た犬が投影

されていた。
「剱甲は戦闘形態では操縦者…仕手の身体能力を大幅に上昇させるという機能が備わっています。そして…この丙竜の場合は二つの飛火の推進力と疾駆の揚力を利用することによって空中戦を展開する事が可能です」
剱甲の背面部が映し出されると、背筋を中心線にして左右対照に飛火と羽のような疾駆が装備されていた。
補足すれば、飛火(とび)の推進力と疾駆(かけ)による揚力を利用した剱甲の飛行を『騎行(きこう)』と呼ぶ。
「対して自律形態ではその名の通り自律行動をすることが可能ですが、それに加えて仕手の命令に従順に従い情報収集をするなど、仕手の命令次第で可能なことがかなり増えます」
「自律行動…ということは、剱甲は人間のような知恵がある生物ということですか?」
疑問に思った男子が手を高く上げて問い掛けた。
「知恵…と言えばそうなのかもしれませんが、少し生物とは違いますね」
佐々木は質問に対して丁寧に受け答えた。
「剱甲は業物・数物問わず人工知能が備え付けられており、基本は事前に鍛冶師が用意した行動を臨機応変に実行しています。そして仕手の命令を人工知能で解釈することによって仕手の助けとなります…この説明で納得できましたか?」
確認すると、大丈夫だったようで、質問した男子は頷いて席に着いた。
その反応に満足した佐々木は他にも質問がないか見回してから講義に戻った。
「剱甲に関しては一旦ここで止めて…次は神樂の説明に移りたいと思います」
声と共に画面が変わったが、今度は画像ではなく単純な文字の羅列が映し出された。

所々赤文字で強調されており、その中には聞きなれた単語も幾つか載っていた。
「神樂…大英帝国周辺ではプリーストと呼ばれていますが…彼女たちは本来人間では到達できない超常現象「神技」を扱うことができる、ということは前回の講義で話したと思います」
一同は揃って頷いた。
「神樂の名前の由来を話しておくと、神代の女性が神々の怒りを鎮めるために奉納の舞をしている最中に突如として炎を扱えるようになり、それを混じえた舞を納めるとたちまち災害が起こらなくなった…という神樂舞伝説から来ています…脱線すると長くなりそうなので、聞きたい方は昼休みや放課後に個人的に来てください」
生徒の大半が知らなかったのか、所々で感嘆の声が挙がっていた。
椛も似たような反応をしていたが、ふと横を見れば要も龍一も大した驚きなく黙々と佐々木の言葉を書き出していた。
その様子を見て椛は慌てて取り繕ったように表情を戻したが、二人はそんなことを微塵にも気にした様子はなかった。
「話を戻して…ここからが今日の大事な話になりますので、聞き逃さないよう充分に耳を傾けてください」
一つ前置きをすると、教室は先程の喧騒が嘘のように静まり返った。
所々で息を飲む音が聞こえそうな静寂の中、佐々木は静かに語り始めた。
「本来ならば互いに力を持った人類は男と女に別れて戦争をしていてもおかしくはありませんでした…というよりも大和書紀には男女の諍いがそれこそ戦争規模で行われていたという記述もありますが…今の貴方たち、そして歴代の武人と神樂で…男と女に別れて争った、ということを少しでも聞いた人はいますか？」
佐々木の問い掛けに対して、一同は揃って首を横に振った。
「では、そのことに関しては…五十嵐君、お願いできますか？」
「……諒解」

佐々木に指名された要は不承不承といった様子ではあったが素直にしたがって席を立った。要は男子の中でも背が高いうえに体格も良い方に分類されるので、かなり目立った。

周囲は陰口を叩いているのか、少しだけ騒がしくなったが、佐々木が睨みを効かせると再び構内は沈黙に包まれた。

「その理由は、武人の鈒甲と神樂が融合…主に『封神(ほうしん)』と呼ばれているこれをすることによって、本来の鈒甲の能力に超常現象を扱う神技が『増幅して』備えられるからです」

「…知っている限りで良いので、歴史面で続けてください」

佐々木が要を促すと、静かに頷いた。

「先に常人の域を超える能力を持つようになった神樂は、大和書紀によれば自分たち女性の権力を強めるための争いをしばしば男性に対して起こしては勝利を続けていましたが、そんな神樂を凌駕する存在が現れました……これについて詳しい記述はどのような書にも記載されていないため割愛させていただきますが、その存在によって両性は大和を守るために手を組みますが、それでも凌ぐことが精一杯、という状況に陥りました」

…ここまでの話を充分に聞いている人間は一割にも満たない。

残りの九割は『無能』が話している、という理由だけでまともに聞いておらず、良くて今までの講義内容を思い出しながら端末に記録、悪くて船を漕ぎ始めているという状態だった。

だがそれでも要は気にすることなく話を続ける。

「大和の場合は、そこで何の奇跡か、天から五つの鎧が…後に『神代五鈒(みよごけん)』と謳われる天叢雲(アメノムラクモ)・十拳(とつか)・草薙(クサナギ)・天之瓊矛(アマノヌホコ)・天羽々矢(アマノハバヤ)の五領の鈒甲がさずけられました。現在ではどれも大和の有名大社に奉じられたか行方不明と、とにかく一般人には触れられない状態ではありますが、これにより男性が戦う力を得ると同時に『神樂と融合』することによって莫大な力を得、その驚異となった存在を追い払うことに成功し、以後武人と神樂は協力関係にあり、大和各州での争い、世界との対立は有りましたが、男女での争いが起こることはあ

りませんでした。他国にも似た伝説は残っておりますが、自分が知っていることはここまでです」
話し終わると、要は佐々木の了解を得ずにそのまま黙って着席した。
「ありがとうございます…と、今五十嵐君の話した内容の一部を試験に出しますので悪しからず」
その発言に話をまともに聞いていなかった生徒たちは反発の声を上げそうになったが、それを佐々木は一喝して鎮めた。
「確かに私はあなた方の入学時に、講義・訓練は参加することに意義がある、と言いました。が、今声を上げた生徒は、出席はしているが参加は一切していない、というのが私の判断です。これに対して反論があれば今すぐどうぞ」
次の瞬間、講堂は不気味な静けさに覆われた。
誰一人としてこれを論破出来る生徒はこの場に居なかった。
五十嵐・獅童・二ノ宮の三名は、別段気にする様子も無く、自身の記録に努めていた。
「…では続けますが…実を言ってしまえば私が今日話そうとしたことはほとんど五十嵐君が話してしまったので…補足程度に幾つか…大和では『神代五剱』という現在の業物を超える剱甲がありましたが、異国にも同様に『国守の剱』となるものが存在しました。大英帝国では『円卓十二剱』、印度では『神武錬剣』…これは大和の字に当て嵌めているため本来は違う読み方ですが…今回はそんな伝説は大和だけに存在するものではない、ということを理解していただければ結構です」
残り時間を一度だけ確認して、佐々木は話を続ける。
「現在では『国守の剱』を元に練造したものを『業物』、大量生産性に重点を置いて鋳造したものを『数物』と呼びます…ここまでで質問は？」
佐々木が生徒に問いかけると間も無く一人の生徒が手を挙げた。
「佐々木先生の剱甲の銘を教えてください」

「私の…ですか？　『隼風』…と言ってもあまり有名ではない鈒甲なので…そしてこれ以上の話は手の内を明かしてしまうことになるので話せませんね…他には…無い様なので…」
話が終わったのか、佐々木が教壇の機械を幾つか操作するとスクリーンはゆっくりと上がっていった。
「それでは、今日の鈒甲基礎理論はここまでにします」
その声と同時に一限の講義終了の合図が鳴った。

『無能』の所以

一・二限は室内講義だったが、三限は場所を移されていた。
晩春と初夏の狭間、吹き抜ける風は徐々に暖かくなり始め、つい二か月前は桃色に染まっていた木々は新緑へと移り変わり、夏の到来を告げ始めていた。
照りつける太陽の下、武人科一年五組の面々は小校庭に集合していた。
生徒たちは何列かに並べられ、その視線の先にはあからさまな『的』が設置されていた。
それぞれの手には小型の銃が握られており、全体がまだかまだかと興奮を抑えきれない様子で教師の到着を待っていた。
銃といっても中に装填されているのは殺傷能力を極力抑えられたゴム弾であって実弾ではないのだが、そこはやはり本格的な訓練になりつつあることを喜んでいるのだろう。
入学後の二ヶ月間は徹底的に基礎体力をつけるための訓練であり、ただひたすらに下地を整える地味なトレーニングの繰り返しの日々だったのだ。
大和で数少ない剱甲を専門的に扱う学園とはいえ、武人科卒業生全員が剱甲を纏って戦う、というわけではない。むしろ剱甲を纏う…つまりは大和国衛軍などに所属できる人間は極めて少数であり、年に十数人輩出出来れば上出来である…それほどまでに狭い門である。その争いに敗れた人間は学園で培った経験を活かして要人警護・警邏（警察）などの職に就くことが多い。
しかし、そんな職業に就いた卒業生も、ここ数十年起こってはいないが、有事の際には防衛力として駆り出されることがある。これはそのために備えた訓練であると言っても過言ではない。
そのため、今回のような実践的になりつつある訓練に対して多くの生徒が期待に胸を膨らませていた。

一部…というよりも一人を除いて…
「待たせたな！　それではこれより射撃訓練を開始する！」
始業時刻より僅かに遅れて、校舎からいかにも教官といった風貌の男教師が現れた。
生徒の中には遅れたことを咎めるような視線を送っている者もいたが、大半はそんなことよりもすぐにでも練習をさせてくれ、と意気揚々としている者だった。
「昨今の戦闘において、佐々木教官の講義を聞いていれば分かると思うが、徐々にではあるが遠距離からの攻防戦へと移りつつある！　俺はお前たちに基礎的な射撃技術をこの一年で叩き込む！　覚悟は良いな！」
このような水無月の太陽に負けぬ熱い宣言から本格的な射撃訓練が始まった。
最初は大まかな基礎知識・動作を教え込むが、十数分後にはすでに順々に「実際に撃つ」練習をし始めていた。
火薬の爆ぜる音が断続的に響く。
半分以上は教官の予想以上の命中率を上げており、所々で感嘆の声があがっていた。
その中でも抜きん出た成果を上げているのは当然というべきだろうか、獅童龍一だった。
シングルハンドで針の穴に通すほどの正確さで悉く的の中心を打ち抜いていた。
それも数発程度ではなく、数十という数だ。
一発の弾丸も外さないその精度は、今まで数多くの生徒を見てきた教官をも驚かせた。
「…さすがは今世代の天才だな！　お前たちも獅童に負けないよう努力を…！」
と、ほかの生徒に対して激励の言葉を挙げようとしたところで、突如発砲とは異なる爆発音が響いた。
何かと思って全員が音のした方向へと視線を向けると半ば予想通

りの光景があった。
「…そこの…お前……！」
「…なんでしょうか？」
教官は怒りを抑えたような低い声をひねり出していたが、当の本人は何事もないような平然とした様子でそこに立っていた。
手に握られているのは、暴発によって原型を留めることができなくなった拳銃だった。
要の周辺には金属片が飛び散っていたが、幸いにも他の誰かに当たるような事は無かったのか、誰も痛みに声を上げるような事態は免れた様だった。
「何をどうすれば学園側で充分に管理されていた銃が暴発するなんて事が起こる！」
「自分は銃火器の類を触れば、問答無用で破壊してしまう性質があるようで…」
「そんな馬鹿げた話があるか！　どうせ俺の話を全く理解できずに適当に弄っていたら壊したってところだろう！」
至極真面目な顔をしてふざけた言い訳のような事を言うと、教官は堪忍袋の尾が切れたのか肩をいからせながら要へと近寄っていった。
そんな鬼気迫るような教官に一切臆することなく、要はその場に静かに立っていた。
二人の距離が互いの手が届くところになると、教官は何の前触れも無く拳を大きく振り上げてそのまま要の顔面へと叩き込んだ。
「お前、名前は！？」
「……五十嵐です」
立ったまま胸倉をつかまれて激しく揺さぶられながらも何とか声を出すことが出来るが、その名前を聞いた教官はようやくこの男が『そうである』事を理解した。
「…成程、佐々木教諭の推薦で転入してきた『鈡甲を扱えない武人』はお前のことか！」

吐き捨てるように言うと、胸倉を掴んでいた手を突然離して突き放した。
「……っと…！」
教官は少し体勢を崩したがすぐに立て直して要の顔を指差した。
「良いか。今後俺は一切お前の面倒は見ない！　勝手に周りの協力でも仰いでいろ、佐々木教諭の推薦だとすればそれぐらいは出来て当然だろうからな！」
「…分かりまし…」
「…んん？」
要が返事をしようとしたところで、教官は別の場所へと視線が向かっていた。
その先では何発もの弾丸を撃ちながらも全く的に当たらない生徒がいた。
彼の周囲では他の生徒が嘲笑を浮かべており、そのプレッシャーに耐え切れず更に緊張して的を外すという悪循環に陥っていた。
「貴様！　この程度の距離で当てることができないとは何事か！」
「ヒッ…！？」
教官の怒鳴り声で体を竦ませた男子は怖々と顔を向けた。
先程の要への体罰が余程印象に残っているのだろう、教官に睨まれた彼は蛇に睨まれた蛙のように体を強ばらせた。
「お前も五十嵐のように一発叩き込めば…！」
要の時同様拳を大きく振り上げて彼に叩き込もうとした。
少年は教官の握りこぶしを見て顔を守るように両手で壁をつくり、顔を背けた。
が、その拳は彼に届くことは無かった。
「教官。申し訳ないが、現在は自分に対しての罰の最中だ。それが終わるまでは他の事に気を散らさないようお願いしたい」
衝撃がこない事をその男子が不思議に思ってゆっくりと目を開けると、五十嵐要が教官の一撃を平然と手の平で受け止めていた。
当事者である二人は何が起こったのか分からないといった表情を

浮かべながら要の顔を見た。
相変わらずの無表情ではあるが、その瞳に静かな怒りが宿っているのが、睨まれた教官には嫌というほど感じられた。
「い、五十嵐…貴様…何時の間…」
教官が何かを言い切る前に、二人の近くで破裂音が響いた。
弾丸は教官の鼻を掠めながらも見事に立体映像標的へと命中した。
音のした方向へ三人が視線を向けると、今世代の天才・獅童龍一が感情のない表情で銃を構えていた。
人に当たりかけたにもかかわらず平然とした態度を取っている彼に対して、教官は得体のしれない恐怖に襲われざるを得なかった。
「失礼、外しました」
「し、獅童！　お前がいる場所はここではないだろう！？」
「先程教官から、敵だと思った者には容赦無く引き金を引け、と教わったのでそれを実践したまでです。そして他にも被害が出ないよう距離を詰めようと思って実行した結果です」
動揺続きの教官に対して一向に平常な態度を保ち続ける龍一は、遠巻きに眺める生徒たちさえも黙り込むほどの恐ろしさを持っていた。
銃口を教官の眉間に向け直し、撃鉄を起こす。
その間僅か０．１秒。
シングルアクションの拳銃とはいえ、これだけの予備動作時間ならば素人のダブルアクションの拳銃にも速さ負けをすることはないだろう。
教官は腰に装備した銃を取り出す暇もなく、ただその場に立ちすくむのみだった。
「ゴム弾とはいえこの距離ならばかなりのダメージになるでしょうね。当たりどころが悪ければ二度と目覚めることができなくなることもありえますしね…」
「ヒッ…！？」
「かな…五十嵐の指導なら俺が請け負いますので、教官は他の生徒

にでも『指導』でもしておいてください。腰が引けていてもそれぐらいは出来るでしょう？」
それだけ脅迫すると龍一は銃口で教官の額を突っついた。
それだけで脅しとしては充分だったのか、教官は足をもたつかせながらも獅童・五十嵐両名から大きく距離をとるように逃げ出していった。
「やれやれ。仮にも教えるべき人間が教えないというのは職務放棄にも程があるだろう…」
呆れたように気迫を緩めながら龍一は拳銃を仕舞った。
殴られそうになった生徒の方へ視線を向けるとそこには既に誰もおらず、少し顔を上げると覚束無い足取りで逃げ出している生徒が見えた。
「そして何の礼も無しに逃走、か…助けなかったほうが正解だったんじゃないのか？」
「思わず体が動いた。後悔も反省もしていない」
「そして一番損をする…か。相変わらず報われないな？」
手馴れた様子であるところから他の生徒にも、彼が訓練無しでも充分に通用することが感じられる。
「…しかし教官相手に脅しとは…いや、『いつも』どおりか…」
「今まではどれだけ暴言を吐こうとも黙ってはいたが、さすがに要相手に手を挙げられれば俺も黙ってはいないぞ」
「…この場合は…あー…わーさすがかっこいいだいて…で良かったか？」
「棒読みな上に疑問形か…意味が良く解っていないなら無理して使わなくて良いぞ…それに俺にはそんな趣味は…」
「え？　お二人は薔薇な関係ではないのでございますか？」
「断じてない！」
横からの疑問に龍一は力強く断言した。
「…ところでアンジェはどうしてここにいるんだ？」
要の指摘通り、要と龍一の会話を見守るような立ち位置にアンジ

ェはいた。
学生服とは異なる黒基調のメイド服はどこから見ても目立つものでありながらも恥ずかしがるような様子は一切なかった。
「あ」
要の言葉にアンジェは思い出したように手を叩いて、数秒の間固まった。
何かと思って待ってみると突然人が変わったかのように慌て始めたのだった。
「申し訳ございません！　アンジェは要さんのケガを聞いて駆けつけたというのにも関わらず盗み聞きした挙句処置が遅れてしまいました！」
「落ち着けアンジェ。それにあれはどう見ても盗み聞いていない」
むしろ堂々とした立聞きで、参加している以上は会話として成立してもおかしくはない…そう思いながらも要は慌てているアンジェを落ち着かせようとした。
落ち着かせようと挙げた両手を見て、アンジェはようやく自分が呼ばれた理由を理解して手に提げていた救急箱を地面において広げた。
「要さん！　すぐに応急処置をしますので座ってくださいませ！」
「…いや、この程度だったら大した痛みは…」
「そうだとしても少なくとも火傷や切り傷が有るかもしれません！　すぐにでもお見せくださいませ！」
普段ののほほんとした雰囲気とは全く異なる気迫を持ったアンジェに逆らうことができず、要は大人しくその場に座って両手を差し出した。
すぐにアンジェはその手をとり、じっと眺めた。
「かすり傷は一の腕に小さいものが一つ…火傷は親指付近に両手に一つづつ…これぐらいならばアンジェでも何とか…！」
ケガを把握したアンジェは右脇に置いた救急箱から拳二つ分の大きさを持つ液体の入った瓶を取り出した。

要はアルコールか何かかと思ったが、蓋を開けても臭いらしきものが一切なかったので何かと思って見ていると、その液体を腕と手の傷に大胆に振り掛けた。
「おい、アルコールをそれだけかけるのはまずいんじゃ…！？」
「大丈夫でございます！　これは単なる水です！」
「…水？」
「はい！　アルコールはあくまで傷口周辺の雑菌細菌を殺すために使いますが、傷口に直接塗りこんでは傷を治す菌まで殺してしまうのです！　水ならば雑菌を洗い流すことだけが出来るので、簡単な傷にはアルコールよりむしろ水の方が最適なのです！」
説明しているうちにアンジェは手際よく応急処置を進めており、説明が終わる頃には既に包帯を巻き始めている時だった。
半ば大袈裟に巻かれている感じもしたが、アンジェの必死な表情を見ては要も断るに断れなかった。
「…これで大丈夫でございます！」
全ての処置が終わると、気が抜けたのかアンジェはいつもどおりの柔らかい笑みを浮かべた。
「…申し訳無いな、アンジェ」
「いえいえ、これくらいでしたらお茶の子さいさいでございます！」
「しかし暴発してから五分と経っていないのに…よく要が怪我したと分かったな？」
「あ、はい。それは…」
と情報源を言おうとしたところで突如アンジェが悲鳴をあげながら姿勢を崩した。
辛うじて倒れたりすることはなかったが、立つのも精一杯といった様子になっていた。
「か…体が重い…ですぅ…」
「だ、大丈夫か！？」
「な、何とか…」
アンジェは全身に重りを着けたような感覚に数秒襲われたが、そ

れもすぐに収まり少し息を整えたあと、普段通りの姿勢へと戻った。
「…さっきの神技から判断すると、情報提供者の名前を出すな、っていうことかな？」
「そ、そのようでございますね…口止めされていたことをうっかり忘れておりました…」
「…気をつけておけよ？　アンジェは一般人なのだから、真っ当に神技をぶつけられたらひとたまりもないだろうからな…」
「……私も神樂の皆様のように、お役に立てる力があればよかったのですが…」
消え入るようなアンジェのつぶやきに、二人は思わず黙ってしまった。
聞こえるか聞こえないかほどの小さな声だったが、その言葉は二人の心に深く突き刺さった。
理由の半分は、今の、気遣いが出来ていなかった発言に対する後悔。
もう半分の理由は、彼も一度アンジェのような気持ちになったことがあるゆえの同情。
そんな時に下手な慰めの言葉をかければ悪化することも重々承知していたため、要も龍一も言葉を慎重に選んでいたのだった。
だがそんな雰囲気もアンジェの言葉によって吹き飛ばされた。
「なのでアンジェはアンジェにできる精一杯のことで皆さんをお助けしたいと思います！」
先程見えた陰りが嘘だったかのように明るい笑顔を浮かべながら、アンジェは意気込んでいた。
すると突如校舎の方から鈍い大音が響いた。
生徒たちは何かと思って音のした方向へ顔を向けるが、別段煙が出ているといったような異常は起こってないということと、学内の教師に慌てた様子が無いということから三人は特に大した問題は無いと判断して会話に戻った。
「…校舎の方で何か有ったようなので、アンジェはお掃除に向かわ

せていただきます」
「……わかった。ただし、一人で解決できないようなことがあれば迷わず俺たちに相談してくれ。可能なことならばなんでも手伝うからな」
「右に同じ。無理して一人で背負うとろくなことにならないからな」
「お気遣い感謝いたします、要さんに獅童さん！　それでは失礼致します！」
元気よく挨拶すると、さっそうと小校庭から立ち去っていった。
背中を見送っていると丁度三限終了の号令がかかっていた。
「…嫌な事を思い出したな」
「同感だ。だからといって目を背けるわけにはいかないだろうが…」
二人は揃って空を仰いだ。
雲の少ない、良く晴れた青い空だった。
対照的に二人の心には見えない陰りが生まれた。
何を思って、何を見ているのか。
二人以外に知る人間は居なかった。
「…要」
「何だ？」
しばらくの間が生まれたあと、龍一が先に口を開いた。
「…『あの時』の後悔を、絶対に俺は忘れない…もう、あんな無力感を味わうのは二度とゴメンだ」
「…そうだな、俺も同じことを思った…」
二人の決心は、誰に聞こえるというわけもなく、空へと消えていった。
「次は剣術の訓練に変わったんだったよな？」
「そうだな。確か今日は模擬戦を時間いっぱい、という話だったから…」
要は龍一の意図を察して軽く笑った。
同時に、龍一も釣られて笑った。
「それじゃあ、お相手お願いします、と…」

「よろしく頼む…」

見守る少女

少し時間を遡って三限開始頃。
場所は神樂科実技訓練教室に移る。
彼女たちも武人科同様ようやく実技的な訓練へと入るようで、現在は小試験形式で順番に神技を発動している最中だった。
少し離れた場所に置かれた立方体に対して神技をぶつけるという、至極単純なものではあったが、だからといって容易というわけではない。
的は一立法メートルの大きさで、それに『まともに』当てなければならないのだ。
距離は十メートルほど。
これに苦戦する女子生徒がかなりいたために、後ろの番号である椛に回ってくるまでの時間がかなりあった。
（一つだけ用意するのではなく、複数の的と教員を用意すればもっと早く終わるのではないか…？）
そんなことを思いながら待っていたが、それでも椛の番が来るのはまだ大分先だった。暇になって何となしに外を見てみれば、丁度武人科一年五・六組の生徒たちが射撃訓練に取り掛かっているところだった。
視線は自然というべきか、椛の幼馴染である要へと釘付けになっていた。
拳銃を暴発させながらも驚いたような素振りは一切見せず、平然とただの鉄くずとなったそれを見下ろしていた。
「…あれは…！」
視力のよい椛は要の手が（重度は分からないが）火傷を負っていることに気付いて思わずその場から駆けつけようと腰を上げかけた。
だが、現在訓練中ということもあるが、今朝突き放すような言葉を言ってしまった手前、どのように接すれば良いかがわからなかっ

た。
「…どうすれば……」
「校舎のキレイは～アンジェが守ります～♪」
悩んでいると廊下から聞きなれた声が耳に入った。
機嫌がよさそうに歌いながら掃除をしているようだった。
（…これだ…！）
そう思った椛は視線を気にすることなく立ち上がり、廊下へと走り出した。
勢い良くドアを開けるとアンジェは「ひぇぃ！？」とよくわからない悲鳴を上げて飛び退いた。
その反応を見て椛は一旦自分を落ち着かせてからアンジェに声をかけた。
「申し訳ない、アンジェ！　一つ頼まれてくれないか！」
「は、はい…！　アンジェに出来ることであれば…」
慌てた様子の椛を見てただ事では無いと判断したのだろうアンジェは姿勢を正して彼女と向き合った。
「さっき大校庭で要が銃を暴発させて火傷を負ったみたいだ！　急いで応急処置を…　ただし私が見ていた、ということは黙っておいてくれると…」
「かしこまりました！　ここはアンジェに任せて、椛さんは授業にお戻りくださいませ！」
言うが速いか、アンジェは間も無くその場から駆け出していった。
その背を見送ってから自分の席に戻ろうとすると、何事かと事情の分からない生徒と教師はそろって椛に視線を投げかけた。
「…お騒がせしました」
軽く頭を下げて自分の席に戻ったが、未だに不安は拭えずに結局意識は授業ではなく要の方へとむいていった。
「！？」
その瞬間、丁度要が教官に何の抵抗もなく殴られる場面であり、思わず窓から怒鳴りそうになったが、寸での所で踏みとどまった。

要を庇いたいという気持ちと、どこかで昔のような要らしく戦って欲しいという気持ちが混ざって待ったのだった。
だが期待に反して要は何をするでもなく素直に教官の言葉を受けていた。
その姿に対して椛は更に裏切られたような気持ちに襲われた。
これほどまでに変わり果てた要の姿を見たくないと思い始めた矢先に、今までの事全ての苛立ちを吹き飛ばすような事が起こった。
教官が怒りの矛先を要から少し離れた場所で的から外し続けていた男子へと変え、殴りかかろうとしたところを要が寸前で受け止めた。
今まで自分のことでは一切抵抗を見せなかった要が、理不尽な暴力を止めるために動いたのだった。
一秒にも満たない短い時間で、十数メートルの距離を詰め、易易と教官の拳を受け止めるという芸当をしながらも、平然としている様子が教官を怯ませた（と椛は見えた）。
その後、教官を龍一が追い払い、アンジェが駆けつけて手際よくやけどの手当を終わらせた。
安堵に思わず溜め息を零しかけたところで龍一とアンジェの会話が聞こえた。
「しかし暴発してから五分と経っていないのに…よく要が怪我したと分かったな？」
「あ、はい。それは…」
「……！？」
アンジェが思わず椛の名前を出そうとしたところを妨害するように半ば本能的に神技をアンジェに向けて発動していた。
神技によって姿勢を崩したのを見て、すぐに解除した。
力を抑えているためケガをすることはないだろうが、軽い脅迫そして思い出させるのには充分な威力だったようで、アンジェは椛の名前を上げずに大校庭から立ち去っていった。
自分の名前が出されなかった事に安堵していると、椛の目の前に

神樂科の教師がいることにようやく気付いた。
「……あの～…」
「……なんでしょうか？」
冷静を装いながら返事をするとやっと反応をしてくれたことに安心したのか強ばった表情を緩ませながら言った。
「はい、次は二ノ宮さんの順番になったので…」
言われて椛が教室を見渡すと、既に試験が終わった生徒は教室から居なくなっており、現在残っているのは椛以下七人だった。
椛よりあとの生徒は更に待つ時間が長いからだろう、何人かは恨みがましい視線を送っていた。
「……今すぐに始めます」
居た堪れなくなった椛はすぐに立ち上がり、教師の指定した線の上に移動した。
椛の立ち位置と目標の立方体の間には他の生徒が神技を外したのであろう焼け焦げた跡や水溜まりが出来上がっていたりしていた。
学園の床自体は何か特殊な仕掛けが施されているようで、時間とともに自然修復していくのだが、さすがに十分やそこらで直し終わるわけではないようだ。
椛は一つ息を吸って対象を見定めた。
「それでは、お願いします！」
教師の言葉を合図にして、視線の上に掌が重なるように手をかざす。
「『辰気（しんき）操作』！」
…椛が神技を発動した後、対象である立方体はそれを乗せていた台ごと床に沈みこみ大音量を響かせた。
椛の後の生徒は後日に試験を受けなければいけなくなったことは言うまでもない。

知られぬ『才能』

三限終了から大した間も無く四限の剣術訓練が始まった。
指導者は学内では恐らく一番の実力を持つ佐々木傭兵だった。
先程の教官とは異なり、訓練開始の十分前…つまり三限終了時には既に到着しており、一人でほぼ全員分の竹刀・木刀・防具を用意していた。
休む間もなくそれぞれが用意された物を身に付け始め、開始時間と同時に模擬戦を始められるようになっていた。
開始から十分。
それぞれ実力に合わせて組んだ生徒たちは竹刀での打ち合いを行なっていたが、やはりというべきか、そこには覇気どころか気迫すらも感じられなかった。
時代が進むに連れて近接戦闘から遠距離の火力戦へと移り変わっているため、先の時間のように熱心に打ち込む生徒はいないに等しかった。
心構えのなっていない人間に対してアドバイスをいくつかしようが無駄であることは充分に理解していたため、佐々木は全体を見回るフリをして、とある場所へと向かった。
小校庭の隅で、二人の『武人』が対峙していた。
五十嵐要と、獅童龍一だった。
その周辺だけが戦場になったかのような雰囲気を醸し出しながら、互いに木刀を構えていた。
防具は一切なし。
木刀とはいえど、当たりどころが悪ければ死亡してもおかしくない。
互いの鋭い気迫が、ぶつかり合う。
「……」
「……」

要は八相の構えに少し工夫を加えた構えを。
対する龍一は青眼の構えを。
要の構えは木刀の背を肩に乗せるか乗せないかといった場所に置き、重心を前方に移すだけで降り下ろせるような物であった。
肩から降り下ろされるであろう袈裟斬りが狙うは最も面積の広い胴体。
生半可な攻撃では防がれて反撃されることが目に見えるが、要の実力・腕力を知って、さらにはその一撃を受けたことのある佐々木にとっては充分な驚異であることは理解出来た。
更に受け流されても構えの特性上次の攻撃…裏切上に素早く移ることが出来るという利点がある。受け止められれば少し木刀を引き、突き出せば良い。
龍一は本来の青眼の構えより切っ先を僅かに落としていた。
刀身の延長線上には要の喉が有った。
『突き』による間合いは踏み込む分普通の『斬り』の間合いより伸びるが、反面狙う面積が喉という狭い範囲なうえに、外した場合のリスクは計り知れない。
というのも、『突き出す』以上は腕を伸ばさなければ充分な威力は生まれず、最大の威力を出すには全身のばねを伸ばさなければならない。
そして狙うは喉である以上、当たる確率よりは回避される確率の方が高い。
だがそれも、『天才』にとっては些細な事だった。
龍一ならば例え外しても即座に刃先を変えて第二撃を繰り出すことは容易であろう。現在の間合いから要が『突き』を避けるための手段は四つ。
一つは後退…だがこの場合は余分な前後移動をしなければならなくなるため、余程の素人でなければ選ばない手段である。故に却下。
二つ、三つは左右に移動して避けること…要の構えの性質上、右に避ければ最も木刀を長く振らなければいけないうえに、不自然な

体勢から振り出す以上充分な力が伝わらない場合がある。左に避ければ木刀の描く軌跡が最短故に最速の反撃にはなるが、その『後手』を外した場合は大きな隙が生まれてしまう。
四つ目は『突き』を切り払う、受け流すなどをした上での反撃。成功すれば最も安全に反撃に移ることが可能になるが、失敗すれば間違いなく被撃。ハイリスクミドルリターンの手段である。
実際の戦場では時間が限られている上に、失敗は死に直結する以上一と四の手段は必然的に可能性が低くなる。自然、残るは二と三の手段になる。
「……」
「……」
どちらも先手必殺の手段を持ちつつも、後手必殺の手段も持ち合わせているため、互いに迂闊に攻撃することが敵わない。
故に膠着状態。
素人なら、何もしていない状況に見えてしまうのは仕方がないが、運の良いことにこの戦いを知っているのはこの場にいる三人だけである。
構え自体が牽制の、達人の領域に近い戦いを、静かに繰り広げているのだった。
（折角なので賭けでもしてみるか…勝つ方を予想して、当たれば晩酌のツマミを一品増やす、で…）
教え子を利用して一人ギャンブルをしていると、前触れなく動きが有った。
先に動いたのは龍一で、素早く一歩踏み込みつつ腕を伸ばして突きを放った。
全体重を乗せた、重い一撃であり、掠るだけでも充分な痛手を与えることが可能だろう。
最短距離を、最速で。
「…！」
だが、要は紙一重でその一撃を避けることに成功した。

解りにくかったが、要の構えは龍一の青眼の構えと違って『窮屈』ではない。
前と左右に動く事が容易であり、点の攻撃である突きを左前方に進むことによって回避と同時に間合いを詰めることにも成功した。
そして先程記述したように、突きの攻撃は必殺の威力を持つ反面、放ったあとの隙が非常に大きいという欠点を持つ。
龍一もこのことを予想できなかった訳ではないだろうが、まさかと思った手段で来られる、ということを予想できなかったのだった。
後退でもなく。
弾くでもなく。
真正面に進む、その姿に驚きを隠せなかった。
そして、決着がついた。
突きから半ば無理矢理に木刀で薙ぎ払うように振るおうとしたが、初動作は要の方が遥かに速かったため、要の木刀が龍一に触れる方が速かった。
龍一の攻撃は、拳一つ分の間がまだ残っていた。
静かな戦いは、静かなまま幕を下ろした。
「参った。俺の負けかぁ…」
緊張の糸が切れたのか、龍一は全身の力を抜きながら木刀を下ろした。
それを見て、要も額に滲んだ汗を腕で拭いながら構えを解いた。
「しかし、龍一も良いタイミングで仕掛けてきたな。一瞬の呼吸の間を取られるのは予想外だったぞ…」
「それでも勝てなかった…少し焦りすぎたか？」
「それは分からないが…取り敢えず腕は互いに鈍っていないようだから安心したな」
「同意。差を付けられていないか不安だったが、これなら大丈夫そうだな」
そこで二人は糸の切れた人形のように崩れ、小校庭の片隅で大の字になった。

「それじゃあ佐々木教諭、俺たちはしばらく休ませてもらいます…さすがにこれを連続、というのは無理なんで…」
「自分も同じ…なので小休憩を挟ませて…」
「あぁ、その程度なら問題ないぞ。自分のペースで好きなように試合してもらうだけだから、無理だと判断すれば好きなだけ休んでおけ」
口調を崩した佐々木は、二人の要求をすぐに受け入れた。
「…では失礼して…」
「それじゃあ、俺は他の生徒も見て来る。午後の講義に遅れないようにだけ注意して…って、もう聞こえてないな…」
既に寝息を立て始めている二人を見て、佐々木は静かにその場から離れた。
極度の集中状態を三十分程維持していた反動なので、精神・身体共に疲れきっている状態だろう。
動いていれば反動も少なく済んだだろうが、戦い方が達人顔負けの、長時間の睨み合いだったので、莫大な負担が両者にかかっていたのだった。
あれだけの試合を魅せられてしまえば、他の生徒の打ち合いは児戯にも等しく、佐々木の心は他の教官が褒めるような生徒を見ても波一つ立てることはなかった。
（まぁ…これで今晩は…）
試合の賭けを思い出して、彼は静かに微笑んだ。
（ツマミ一品追加…だな。あいつにバレないように気を付けないと、だな…）

幼馴染

「…それで…二人はこの時間まで…寝てたの？」

昼休み。

既に半分ほど終了したころに小校庭で寝ていた二人は目を覚ました。

当然食事を摂っているわけが無く、慌てて食堂に向かったところ、目の前の彼女と同席して無事昼食にありつけた。

時間が半分ほどすぎても食堂は依然として人で溢れかえっており、彼女に見つからなければ何も食べずに午後の講義に挑まなければならなかったかもしれない。

「あぁ、誰も起こしてくれないもんだからぐっすりで…」

「…普通は…そこまで寝ない…それに…自業自得」

「相変わらず手厳しいな、首藤は…」

「しかし遥が食堂に来る途中に俺たちに気づいていてもおかしくなかったんじゃ？」

「だから…自業自得」

「…成程、それぐらいは自分でなんとかしろ、と？」

正解だったのか、首藤遥は自身で作ってきたのであろう弁当を広げながら頷いた。

体が他の女子に比べて小さいので、弁当もそれに合わせて小さめ…というわけではなく、食欲旺盛の男子でも引いてしまいそうなほど大きな物だった。

白米半分、色取り取りのおかずが半分と、如何にも女子らしい品目なのだが、いかんせん量が多いので少しばかり可愛らしいという言葉とは疎遠な状態に見える。

「しかし態々食べずに待っていたところを見ると、やはり首藤は優しいな」

「…そうでもない…」

照れたように顔を伏せるが、時折気になったのか、遥は視線だけで龍一の方を見た。
「まぁ、食べながら話すのも楽しいからな。待っていてくれてありがとうな、遥」
「……うん…いただきます」
「「いただきます」」
その答えに満足したのか、遥は小さく微笑んで弁当に手を付けた。
ただ、その大きさのあまり要と龍一のスペースが圧迫されており、机から微妙にはみ出した皿に気を付けながら食べ始めた。
「ところで、遥の方の授業はどうだ？　俺たちは徐々にだが実践的な…といってもまだ釵甲は使わないが、訓練も組み込まれ始めたが…」
「私たちは…一ヶ月位前から神技の精密操作に入り始めた…」
「そうか…遥に自慢しようとしたらさきを越されていたのか…」
「首藤の神技は確か…」
「『力量方向操作』…使い勝手が…難しい」
箸を止めることなく進めながら、遥が丁寧に答える。
「…ただ逆を言えば使いこなせればとてつもない効果がありそうだ」
「使い方次第だな。薬も毒も元を辿れば同じものだからな…あ、その玉子焼き旨そうだな。この天ぷらと交換できるか？」
「……うん、分かった…」
少し迷ったようだったが、交換するものを確認すると即交換に応じた。
唐揚げと天ぷらを交換する場面を見て、さすがの要も突っ込まざるを得なかった。
「…天ぷらそばの天ぷら…それも一個だけの海老天を交換とは…」
唯一乗せられた大物を交換に出す親友を信じられないものを見るような目で見ると、それに対抗するように龍一も口を開いた。
「そういうお前も、何でメニューに乗ってない『野菜の玉子綴じ丼』なんてものを頼んでいるんだ？　しかもその量で百円って…」

龍一が指差した要の昼食は、カツ丼のカツを野菜に変えたような丼物で、量は遥ほどには及ばないが、それでも二人前はありそうな器に山のように盛られていた。
「親しくなった食堂の人が開発したものの様で…いろいろ試してみる代わりに一律百円という条件付きでな…」
「本当にお前は普通の人とのつながりが広いな…」
「褒めてもこれはやらないぞ？」
「遠慮しておく」
そんな会話をしているうちに昼食も食べ終わり、時間も後十分程度で午後の講義が始まるという頃になった。
「…っと、そろそろ動かないと遅れるな」
最初に腰を上げたのは龍一で、それに着いていくように遥が立ち上がった。
遥は龍一の後ろにピッタリとついて行き、端から見れば兄妹のようにみえた。
「…首藤は龍一に懐いているように見えるのだが…二人はどんな関係に当たるんだ？」
ふと疑問に思ったのか、要は思わずそんなことを口にしていた。
その声が耳に入ったのか、二人は揃って振り返った。
「どんなって…そういえば要には俺たちの事を話していなかったか？」
「全く。というよりお前の学園での人間関係は一切把握していないな」
そういえばそうだ、と気付いたように龍一は指を鳴らした。
それを真似しようと遥も試してはいるが、力が足りないのか、それともコツを掴めていないのか、擦れるような音だけが聞こえた。
「俺と遥は幼馴染でな。今年で十年目の間柄だ」
「随分と長いな」
「何年かは会わなかった…最初に龍君と会ってからが…十年…」
「と言ってもそんなのは一年二年の話だから、途切れるようなこと

も無かったな…」
懐かしむように話す龍一に、要は思わず自分の幼馴染を思い出した。
五年ぶりの再会だというのにも関わらず、自分の不甲斐なさが原因で間に亀裂を走らせてしまったことを。
訓練以外の時間では、どうすれば仲を直せることができるかなども考えていたが、話すきっかけも無ければ話題もないために行き詰まってしまった。
授業の合間にも一応話しかけようとはしたものの聞く耳を持たないようで、声をかけようとしただけで椛はわざと他の友達に話しかけるような、あからさまな避けがあった。
（…どうしたものか…）
決して要もこのままで大丈夫だとは思っていない。
だから自分の頭で思いつく方法を色々と考えては見たが、どれも上手く行くようには思えないと判断して、一度意識を別の方向に向けることにした。
遥と分かれるまでの間、龍一は彼女との思い出を再び噛み締めるように語りながら歩いていた。

神州千衛門影継と少女《壱》（前書き）

ようやく本格始動開始です。
今後は有名な刀が剱甲となって登場します。名刀の代名詞や、英雄の剣…オリジナルも幾つか混ぜますが、十領十色の個性を楽しんでください！

神州千衛門影継と少女《壱》

午後の講義もなんとか無事に終わり、帰り支度をしているところを要は佐々木に呼び止められた。
「要、今から時間を取れるか？」
「……教諭…？」
いつもよりも遥かに小さな声で話しかけてきていることから、何か重要な事かと思って、要も少しだけ身構える。
「俺は必要ないのか？」
当然隣にいる龍一も気になったのか、話しかけてきたが気を使っているのか小声だった。
幸い周囲は放課後のことについて話し合ったり、部活へと移動したりと、二人のことを気にする生徒は龍一以外にいなかった。
「いや、今回は要だけに来てもらうことになっている…龍一、お前は先に帰っていろ」
少々きつい言い方になってはいたが、龍一はそこに深い意味があると判断して潔く引き下がった。
「…諒解です。ただ、『正解』だった場合は俺にも事後で良いので連絡をお願いしますよ？」
「それは当然だろう」
「なら大丈夫です…と」
納得した龍一はすぐに立ち上がり、適当に近くに居た、帰ろうとしているクラスメイトを誘って去っていった。
残された二人は龍一の背を見送ってから立ち上がった。
「よし、時間もないからさっさと行くぞ」
「諒解」
佐々木を先導にして要は黙って彼について行った。
ひたすらに長い廊下を抜けて、決闘場を挟んだ校舎の反対側まで静かに歩いていった。

ある程度見慣れた場所とはいえ、教諭と歩く事は滅多に無いため、少しだけ新鮮な景色に見えた。
十数分後。
途中関係者以外立ち入り禁止の看板が立てかけられていたにも関わらず、佐々木は施設の中へと入っていった。
一瞬要も入ることは躊躇ったが、目的地がここではないと佐々木が言ったために仕方なく注意を無視して進むことにした。
一旦距離が離れた佐々木に追いつくと、丁度何らかのセキュリティを解除している真っ最中だった。
声紋・掌紋・網膜…複数の認証を必要としている事から、かなり重要な場所であることは間違いなかった。
数十秒ほど経つと、ようやく全てのセキュリティを解除できたようで扉が開いた。
中の電気は点いておらず、深い暗闇が長く続いていた。
佐々木はその中に躊躇うことなく入っていくので、要も静かにそれを追って部屋の中へと踏み込んだ。
そして、本能で、肌で感じ取った。
そこに何があるのか、を。
「これだけの厳重な警備ということは…教諭…もしかして…」
「正解だ。要の想像通りの物がここにある…」
佐々木はそう言って自身の手にある端末を幾つか操作すると、天井に設置された光源が全て灯されて、『それ』を照らし出した。
漆黒の鈒甲が、そこにあった。
自律状態ではなく、装甲を展開した、いわゆる戦闘形態で。
何かを、誰かを待っているかのような、そんな感じに要は襲われた。
作りから相当の…それこそ一生に一度でも目にかかることができれば武人として最上の喜びだと断言しても良いほどの業物であることが本能的に理解できた。
「打たれた鈒甲銘は…―神州千衛門影継(しんしゅうせんのえもんかげつぐ)…とある山奥に有った鍛冶

師の蔵に死蔵されていた、業物の鈒甲だ」
「…影継…ですか」
「今のところ十五人程の生徒に触らせてみたが一切反応せず…今回ようやく要の接触許可が降りた、ということだ。何か質問は？」
「他の教師陣がよくそんなことを許しましたね？」
「あいつらが許したんじゃない、俺が許させた。少々長い御話し合いになったが…」
「…諒解。何があったかは大体理解できました」
疲れを露わにした佐々木が何をやったのかは詳しく聞かないことにしたらしく、要は部屋の奥に鎮座している鈒甲の前に移動した。
佇む黒武者の姿は、どのような悪鬼魔王すらも退けかねないただならぬ雰囲気を持ちながらも、鍛治師の気高き信念を貫き通した、息を飲ませてしまうほどの美しさも兼ね備えている。
銃火器の類は一切なく、見た限り主要兵装は太刀と鎧通しだと判断した。
この鈒甲に魅入られた要は、吸い込まれるように黒武者に手を伸ばし、艶やかな装甲に軽く触れると…
甲高い装甲解除の音が部屋響き、漆黒の鈒甲に光が纏い始めた。
「な…！？」
驚く要を無視するかのように、漆黒の鈒甲は次第に光を強めていく。
戦闘形態の鈒甲はパーツに分かれ、舞った。
要を中心にして廻る鈒甲は、その勢いで渦を巻き起こしていた。
四方から同じ力が加えられなければ、立っていることすらままならないほどの、激しい風が。
「グッ…」
突如、漆黒の鈒甲から莫大な量の情報が脳を焼き切らんとばかりに流れ込み、内側から破裂するのではないかと思われるほどの頭痛が同時に襲いかかってきた。
しかし苦悶の表情を浮かべようとも、情報の流入は留まることを

知らず、徐々に頭の中が真っ白になっていく。
　すると突然、雑然とした情報が一気に吹き飛び、眼前に『何か』が現れた。
《問おう、汝にとって剱甲は何たるかを…》
　頭の中に直接叩き込まれるように、声が響いた。
　低く気高い声が、一言一言が、要の身体を揺さぶった。
「…剱甲は…」
　雑多な情報と共に、心の枷となっていたものまで流されたのか、要は『何か』の問い掛けに対し、自然と言葉が出ていた。
「…『剱』をもって、民草を守る『甲』となる。故に『剱甲』…護るための、力だ！」
　心のそこで燻っていた灯火が、言葉と共に焔となっていくことを、『何か』は、そして要自身も感じた。
《善かろう、ならば唱えよ！　我と共に戦う、誓いの祝詞を！　護るための力として、存分に振るえ！》
　響く声と共に、要の頭に言葉が浮かぶ。
　それが、この剱甲…影継の信念であることを理解して。

《世に闇あれば闇を斬る
　世に悪あれば悪を討つ
　剱甲の神髄、此処にあり！》

　己を奮い立たせるその祝詞を。
　声の限り、叫んだ。
《委細承知！　これより、我は貴殿の剱甲と成らん、神州千衛門影継也！》
　その言葉と共に風が収まり、徐々に光が集まり、何かを明確に象っていった。
　四方からの力が失われると、要は疲れきったように後ろへ倒れ込んだ。

ようやく目が開けるようになったところで、要は足元に柔らかい感触が有ることに気が付いた。
まだ視界が不完全なので、手探りでそれが何であるかを調べようとすると、手の平に絹のような手触りの、弾力性のある何かだということに気付いた。
「うぅ…ん…？」
だが触っているうちに聞こえた何かに、要は身を凍らせた。
徐々に視界が戻ってきて、触っていた何かの方へと視線を移すと…

そこには何故か、全裸の少女が眠っていた。

「なっ…こ…！？」
声をあげようにもあまりに焦っているがために声にならず、その場から逃げようにも、太腿に少女の頭が乗っかっている上に足を抱きとめられているために全く動けなかった。
服越しに伝わる柔らかい感触は女性特有の柔らかさを持ち、その体からは蜜のような甘い香りがただよい、要の鼻腔をくすぐった。
理性が吹き飛ばされそうになるのを必死に抑えて、状況を把握しようと鈍りかけた頭を可能な限り全力で回転させる。
そこでようやく、ここに入ったのは要一人でないことを思い出した。
「さ、佐々木教諭は…！？」
助けを求めようと連れてきた男を探してみると、佐々木傭兵は部屋の隅で伸びきっていた。
装甲解除の際に発生した衝撃波で吹き飛ばされたのか、壁に背をもたれかけるように倒れ込んでいた。
何をすべきか全くわからない状況がしばらく続いていると、眠っていた少女がようやく目を覚ました。
「ん～…少しうるさい…わね…」
寝惚け眼を擦りながら体を起こし、目の前にいる要をぼんやりと

見つめてきた。
褐色の肌に、黒い銀髪、琥珀色の瞳で、要を見つめた。
「……初めまして…か？」
間の抜けた挨拶をすると、ようやく少女も意識が覚醒し始めたようで、数秒後には嬉しそうな満面の笑顔を浮かべた。
「…初めまして、御影（みかげ）よ」
《…挨拶よりも恥じらいを持て…我は神州千衛門影継と申す。以後、貴殿の釼甲となろう》
…それが、五十嵐要と御影、そして神州千衛門影継の出会いだった。

神州千衛門影継と少女《弐》

運良く食堂が空いており、駆け込み同然で要はいくつかのメニューを注文した。
というのも、釼甲から突如現れた、御影と名乗った少女が空腹を訴えたためだった。
佐々木に頼んで何とか女子用の制服を着せて、要が背負って無事誰にも見つかることなく食堂に到着することができた。
現在、御影は『野菜の玉子綴じ丼』を勢い良く掻き込んでおり、空腹を満たしていた。
「これは…知らないうちにこれ程までの美味が生まれているなんて！」
「分かったから落ち着いて食べてくれ。さっきから飛び散った食べ滓を処理する身にもなってくれ…」
旅行記での食事のような感想を述べながらも御影の箸は留まることを知らず、食べ始めてから僅か五分で完食仕切ってしまった。
「御馳走様」
「気に入ってもらえたようで何よりだ…だが歳相応の落ち着きをだな…」
「分かっているわよ。今回だけ大目に見ても罰は当たらないでしょ？」
大人びた話し方や体型とは対照的に食欲旺盛な子供のような食べっぷりに少し呆れながらも要は面倒見良く食べこぼしを始末していた。
量は昼に要が食べたものより1．5倍ほどだったのだが、それを短時間で食べきったことに要は驚きを隠せなかった。
「…とても女子が食べる量じゃ無いな…」
「ん？」
要の疑問が聞こえなかったのか、御影は箸を銜えたまま首を傾げ

た。
身長が一七〇程度の身体で、要以上の量を食べながら平然としている事が要を呆気に取らせた。
「…気にするな。それよりも箸を口に銜えるな、行儀が良くない…」
「…ん、分かったわ」
要が指摘すると案外あっさりと従った。
「みっともないところを見せたかしら？　なにせこの時代のことはまだ分かっていないことが多いから…」
「よし、折角だからお互いを知り合うために自己紹介でもしよう、俺は五十嵐要。大和国立天領学園の一年五組所属だ」
「……五十嵐…？」
「ん？　何かおかしなことでも言ったか？」
「いえ…少し知っている名字だったからつい…ね」
なんでもない事を強調するように両手を挙げるが、その表情は何かが引っかかっているような顔だった。
だが要は深く追求しないで御影を促した。
「それじゃあ、二度目になるけど…まぁ良いでしょう。私は御影。齢十六の釼甲鍛冶師よ」
「……は？」
「あら？　声が小さかったかしら？　私は御影…」
「いや、聞こえた。聞こえたが少し信じきれない単語が出てきたので……鍛冶師？」
「あ、そっち？　残念だけど、真実よ」
「……」
要は頭痛を和らげるように眉間を揉みながら上をむいた。
釼甲鍛冶師…名前の通り武人が装甲する釼甲を錬造する者を指す。
数百年前の業物釼甲最盛期にはそれこそ鍛冶師の溜まり場のような集落が有ったこともあるが、現在では存在が確認されている鍛冶師は非常に少ない上に、数物釼甲が鋳造されるようになってからは鍛冶師を志す者すらほとんどいない、というのが現状だ。

ただ、鍛治師は武人として戦線に立てなくなった者がなる、という場合がほとんどである…つまり女性の釼甲鍛治師は極めて珍しい。
それに加えて要と同い年の少女が…ということが、要を更に驚かせた。
「それで…御影…で良いか？」
「えぇ。それ以外に呼びようがないでしょうし」
「御影は何故釼甲の中にいたのかを聞かせてもらっても良いか？」
「私の最高傑作・神州千衛門影継の武人が誰になるかを見届けるためね」
御影は迷わず即答した。
逆に、質問した要が何も言えなくなってしまうほど、真っ直ぐに。
「？　変なことでも言ったかしら？」
「…そのために何年もの間…釼甲の中に自分を封じた、ということか？」
「そういうこと…ところで、今は何年かしら？」
「…大和歴では２０２３年だ」
「…ということは四百年以上釼甲の中にいたわけね…それなら見慣れないものがいくつあってもおかしくはないわね…」
四百年。
それだけの間、自分の釼甲の行方を知るために自身を封印してきたということだ。
食堂まで来る道中、御影は見慣れないものに逐一反応し、これは何かと質問してきたことはそういう理由があったから、と要はようやく理解することができた。
「それで…俺が触ったことによって装甲解除がされて、御影は再びこの世に出ることが出来た…という事で大丈夫か？」
「正解…話が早くて助かったのと…少し遅れたけれど、おめでとう。これで貴方は影継の仕手となったわ」
御影はそう言って要の横を指差した。
そこには鋼の鍬形虫が大人しく横たわっていた。

全長が大の男の半分を超えるのではないか、というほど大きく、戦闘形態の面影がどことなく感じられる。
御影曰く、これが神州千衛門影継の自律形態ということらしい。
《…我を呼んだか？》
御影が指を指したことに反応して影継は顔をあげて尋ねた。
人工知能が備え付けられている事は知っていたが、ここまで人間らしい反応を示すものは珍しく、
「いや…これからよろしく頼む…と、俺の力になってくれるということに礼をしたいと思って声をかけようとしたところだ」
《それなら言うに及ばず。汝のような志と正しき力を持つ者に力を貸すことが釼甲の誉れ…感謝することはあれど、感謝を言われる覚えはない》
「それでも、だ…未熟者ではあるが、影継に相応しい武人になれるよう全力を尽くす…それだけでも誓っておきたくてな…」
《…委細承知。だが練造主の話はまだ終わっておらぬようだ…我はもうしばらく辺りを廻るとしよう…》
そう残して影継は窓際へと歩いていった。
六本足で地を歩く姿は、どこか雄々しかった。
「…自律形態が昆虫というのは珍しいな…」
「でしょうね。私の時代では蜘蛛や髪切虫に蝗、変り種としては蜻蛉みたいに色々あったけど、それでも主流は馬や狼、鷹といった具合だったからね…今ではどうだかわからないけど…」
「業物はあまり知らないが、数物に限って言えば犬や猫が主流になっているな」
「…そうなのね」
そう言って御影は残念そうに息を吐いた。
「取り敢えず必要なことは話し終わったから、今度はこちらからも質問しても良いかしら？　親睦を深めるためにも…ね」
「俺で答えられる範囲であれば、という条件付きなら」
「まぁ基本簡単な事ばかりで、分からないことがあれば追々尋ねる

から大丈夫よ…まずは、要が、今私が使っている女物の髪飾りを持っていたのは？」
御影は自身の髪を束ねている黄金色の髪留めを手に乗せてみせた。
藤の花が彫られており、金属で出来ているために重量のある、挟み込むタイプの髪留めだった。
「…姉さんのものだ。一応言っておくが貸しただけだからな。傷付けるなとは言わないが丁寧に扱ってくれ」
「分かっているわよ…でもお姉さん、ね…ここの学園生かしら？」
「違う」
「それなら…年がかなり離れている、ということ？」
「残念ながら年の差は一つだけだ」
「……？　なら今はどこに…」
「さあ…な。二年前に消息不明になってからは全く分からない」
そう言って要は遠くを見るように外を眺めた。
御影から見えた要の横顔は、悲しそうでありながらも、悔しそうな感情が滲み出ていた。
「ごめんなさい、嫌なことを思い出させたみたいで…」
「気にするな」
それだけ答えると、しばらく沈黙が続いた。
「…他にも聞きたいことは…」
と、御影に向き直ったところで要は口を噤んだ。
彼女はテーブルに突っ伏して寝息を立てていたのだった。
「…眠った、のか…？」
静かに声をかけても返事がかえってこなかった。
慣れぬ環境に気疲れしたのか、そして要という人柄に安心したのか、非常に安らいでいることが分かる寝顔が見えた。
起こすのも躊躇われたので要は仕方なく寝かせることにした。
「…しかし、このままだと風邪をひきかねないな…」
ある程度空調が効いていたとはいえ、今は食堂の閉店時間間近になっているため、電気系統が徐々に消され始め、夕暮れ時というこ

ともあってか空気が冷たくなり始めていた。
「…仕方無い。取り敢えずどこかに移動させ…」
と、席を立ち、御影を背負って運ぼうと彼女を乗せたところ、背中と手に何か非常に柔らかい感触があった。
思わず体を硬直させてしまい、要は御影の格好について色々と思い出し始めた。
まずはじめに、装甲から現れた時、彼女は一糸まとわぬ姿だった。
次に、その場しのぎではあるが佐々木教諭に頼んで女子の制服『のみ』を調達し、それを着させた。
そして今、要の両手と背中に感じる柔らかさより一つの疑問が生まれる。
「……下着は！？」
色々と思い返してみれば、現在とんでもないものを背負っているということに要は気付いた。
理性が崩壊する前に慌てて椅子の上に下ろして対処法を考えようとしたが、目に入った光景がそれを阻害した。
「うっ…！」
下ろし方が雑になったためだろうか、御影の制服の上下が捲れ上がって、そこから彼女の肌が覗いていた。
辛うじて大切な場所は見えていないが、それが逆に官能的な色気を醸し出しており、要は次第に冷静さを失い始めていた。
「…どうすれば…！？」
何の手段も思い浮かばず、手をこまねいていると聞き覚えのある明るい声が響いた。
「呼ばれず飛び出てジャジャジャジャーン、でございます！」
両手に箒とちりとりを構えたアンジェが元気よく食堂へと入ってきたのだった。
「あ、アンジェ！？　どうして此処に…？」
「いえ、そろそろ食堂も店仕舞だと思いましてお掃除…を…」
要の問い掛けに、律儀に答えたアンジェではあったが、要の目の

前にいる少女を見てどんどん声が小さくなっていった。
　するとアンジェは要に涙ながらに訴えた。
「要さん！」
「…なんだ？」
　嫌な予感を感じつつも、要は静かに答えた。
「アンジェは…アンジェは、要さんはそんなことをしないと信じておりましたのに！　どうしてこのようなことを…！」
　一歩また一歩と後退りを始めて、アンジェは要から距離を取っていた。
「…済まない、出来れば俺の言い分も聞いてくれると…」
「…分かっております。持て余した欲を吐き出させる事が出来なかったアンジェにも責任の一端が…」
「……全く分かっていないうえに何を言い出している…そして責任って何だ？」
「それは当然夜のごほ…」
「そこまでだ、聞いた俺が馬鹿だった。何があったかを全て話すからそれ以上は言うな。そしてできれば協力をしてくれ」
　混乱の極みにあるアンジェを十分かけて、どうにかして宥めることができた要は放課後に起こったことを事細かく話してようやく理解と協力を得られた。

神州千衛門影継と少女《参》

「……ようやく帰って来られたな…」
既に辺りは暗闇に包まれ始めており、ポツポツと街灯が点き始め道を朧気に照らし出していた。
とてつもない疲労を抱えながら歩いていく事数分、要は学園内に設置された寮にようやく帰ってくることができた。
今日ほどまでに要が寮に到着できた事に対して感動を覚えたことは無かった。
アンジェに説明した後、御影を取り敢えず休めるような場所に移動させたいと申し出ると、アンジェの部屋で寝かせることを提案された。
彼女曰く、アンジェが寝泊まりしている場所は学生寮ではなく学内職員の詰所のような場所であり、監視のようなものはほとんどなく、そこに住んでいるのは現在アンジェのみである為問題はないとの事のようだった。
とにかく途中ぶつかった最大の問題であった御影の隠し場所は協力者によって大したことなく解決することができた。
「…今度会ったときにでも改めて礼を言っておくか…」
ぼやきながら廊下を歩いていると途中向こう側から話しながら歩いてきた見知らぬ生徒に肩からぶつかられた。
「…っと…失礼しました」
「チッ…無能野郎か…気をつけろ！」
「目障りだからさっさと失せろ」
少しふらつきながらも姿勢を正し謝った要に対してすれ違った生徒は捨て台詞を吐きながら去っていこうとした。
《……我が仕手に対して何たる暴言…許すまじ…！》
するとどこからともなく篭った声が響き渡った。
何事かと思った生徒たちは慌てて周囲を見回したが、声の主は見

当たらない。
《武人の格がここまで堕落しているとは何たる悲劇…しかし『これ』ならば一つ二つ死しても問題なかろう…》
人ではなく物として見ているその数え方は、見えない事に加えて更なる恐怖を三人に与えた。
その不気味さに耐え切れなくなったのか、生徒たちはその場から脱兎のごとく逃げ出した。途中管理の教師に注意されたが、それすらも聞こうとしない様子だった。
そんな三人の背を見送った後、要は天井を見上げた。
影継が、そこに居た。
一応見つからないようにと要が考え出した案で、途中までは何事も無く影継は要の真上にいたのだが、先程のやりとりが気に食わなかったのか、こうして怒りを露わにし脅しをかけたということだった。
「…影継、俺なら何の問題もない。気にするな」
《しかし主…！》
「鈡甲の誓からお前の正義感の強さは何となくだが分かっている…だがそれを向けるべき相手は先程のような、取るに足らない小悪か？」
《……》
影継からの返答は無かった。
だが、その静けさには『怒り』は含まれておらず、落ち着きを取り戻したように見せた。
「分かってくれればそれでいい…兎に角俺が良いと言うまで静かにしていてくれ。愚痴なら部屋でいくらでも聞こう」
《諒解した》
静けさを取り戻したその言葉を確認すると、要は早足で自室にいそいだ。
ドアを開けて影継に合図をし、部屋に入ったのを確認するとすぐに閉めた。

「おぉ、おかえり要。どうだった…って聞くまでも無さそうだな？」
部屋では龍一が勉強している最中だったようで、要がドアを開けると同時に振り返りそこにあるものを見て何があったのかを理解した。
その表情は楽しそうでもあり、同時にどこか安心したような顔だった。
「あぁ、龍一の想像通りだ…いくらかの想定外はあったが…」
「成程、それで少し疲れているのか？」
《…主、この者は？》
影継は自身の鋏を龍一に向けて要に尋ねた。
龍一は影継が問いかけると同時に席を立ち、手を差し出した。
「おっと、自己紹介が遅れたな。俺は獅童龍一だ。五十嵐要のルームメイト…同室の人間と言えばわかるか？」
《…神州千衛門影継と申す…以後見知りおきを》
差し出された手に影継は自身の鋏を差し出した。
意味を理解した龍一は静かにそれを握って軽く振った。
「こちらこそ…成程、要が仕手となるだけあって性格がそっくりだ」
影継の反応に笑いながらその手を離して要を見た。
「…それじゃあ俺の方も紹介したほうが良いか？」
「だろうな。顔合わせ無しで正宗に出会った場合影継が何をしでかすか分からないからな…」
「諒解…というわけだ、出てこい正宗」
龍一の掛け声とほぼ同時にベッドの下から一本の棒のようなものが現れた。
その先端がしばらく周囲を見回すように動いたが、問題ないと判断するとその本体がゆっくりと現れた。
褐色の鋼を持つ甲虫だった。
大きさは影継の自律形態より少し小さめではあるが、それを補うように巨大な角が隆々と反り返っていた。
《…どうした、主？　俺を呼ぶと言うことは何か異常事態でも起こ

ったのか？》
「話を聞いてなかったのか……いや、この部屋に新しい仲間が入ったから正宗にも紹介しようと思ってな」
影継とは異なった、少し朗らかな口調の釼甲だった。
龍一は出てきた『正宗』と呼ばれた甲虫にも分かるように影継を指し示した。
鍬形と甲。
形態の元となった自然界では互いに天敵なので、表情には出さないが内心要は衝突でも起こるのではないかと焦っていた。
《……》
《……》
静かな睨み合いが数秒続いた。
その間人間二人は一言も口にすることなく、二領の行く末を見守っていた。
先に言葉を発したのは鍬形だった。
《…お初にお目にかかる。我は神州千衛門影継と申す。来度より五十嵐要を仕手とした釼甲になった》
《御丁寧にどうも。俺は相州五郎入道正宗だ。貴甲の名は俺の時代には聞かなかったが…相当の業物であると見受ける…如何に？》
《名も実績も無い死蔵釼甲だ。四百年間蔵に閉じ込められて今日ようやく陽の光を浴びたところよ》
《それならば俺と同類だ。貴甲となら上手くやっていける気がしてならないな！》
《言われれば…正宗殿も数百年死蔵されていた釼甲だったな…貴甲とならば話も合うだろう！》
親近感が湧いたのか、正宗と名乗った釼甲は突如口調を改めた。
影継もまんざらでもないのか、正宗とじゃれ合うように角をぶつけ合った。
「…甲と鍬形の仲が良い、というのは少し奇異な光景にも見えるが…」

「細かいことは気にするな、要。取り敢えずこれで顔合わせは大丈夫そうだな。正宗も影継とうまくやっていけそうだ」
（…あの釼甲の誓通りであれば…俺の、闇を払う力として…これからもよろしく頼む）
心の中でそう告げていると、会話に入ってこない事を不思議に思った龍一が手を招いた。
「要、お前も入ってこい！　今正宗と影継が相撲始めているんだ！決め手を見逃すぞ！」
「分かった…ってそれは影継が不利じゃないか？」
《ぬぅ…！　その角の長さ…卑怯では！？》
《なら白刃取りの要領で返せば良いだろう！　貴甲は図体が大きいうえに質量があるからなかなかに持ち上がらん！》
そんなやり取りをしているうちに夜は更けていった。
ちなみに影継と正宗の対戦成績は十勝八敗と、影継の辛勝だった。

神州千衛門影継と少女《参》（後書き）

ようやく影継始動に漕ぎ着けました。
それを記念して少しだけ提案があります。
『読者の皆様が作品に出したい鈡甲を募集します』
実在する、もしくは伝説として残っている物が主になってしまいますが、オリジナルも良ければ提案してください。駄文ではありますが、自分の作品の中で動かして見たいと思います。
アドレスは以下に。
ｋ．ｍｕｒａｍａｓａ@ｈｏｔｍａｉｌ．ｃｏ．ｊｐ
それでは、次回（明日二十時）もお楽しみに。

和解

翌朝。
五十嵐要は寮の裏庭に居た。
手には木刀。
身に纏うは道着。
虚空を見つめながら木刀の背を肩に乗せるか乗せないかというような場所に構えていた。
どれだけの間、そのままで構えていただろうか。
次の瞬間には迷うことなく踏み込んでおり、鋭い袈裟斬りを放っていた。
「はっ！」
そして返す刀で左からの横一閃、左手を放して全身の体重を乗せた神速の突きを目に見えない『何か』に容赦無く叩き込んだ。
「クッ…！」
そして今度は攻勢から防戦体勢に素早く移って何かを受け止めるような動きをし始めた。
後退しつつ、時には攻め手を混じえながら鬼気迫る様子で要は『何か』と闘っていた。
「ぐっ…！？」
しかし数十秒続けていると、突如要は姿勢を崩して背中から倒れていった。
大の字になった要は荒く息を吐きながら広く澄んだ空を仰いでいた。
「…また手を間違えたか…」
仮想敵仕合。
戦い慣れた相手を想定し、実践的な仕合をするという、端から見れば間抜け極まりない訓練である。幸い時間が時間なので起きている奇特な生徒も少ないので、彼の奇怪な行動を知る人はほとんど居

なかった。
要が苦悶の声を上げたのは防御から攻勢に移ろうとした瞬間だった。
本来踏み込まずに次の一手へつなげるべき場面で、その一撃で決めようと欲を出してしまい、不必要に付け入る隙を見せてしまった。
素人ならば気付くかどうかの一瞬ではあるが、要が見据えていた『空想敵』はそんな一瞬でも見逃すことのない男だった。
強く握っていた木刀は、自然手から力が抜けたために芝生の上に落ちた。
集中によって疲労した体に鞭を打ちながら起きると、いつもはいない観客がそこに居た。
既に学園指定の制服を身にまとっており、凛とした態度を崩すことなくその黒髪を掻きあげていた。
「…朝から精が出るな？」
「…もみ…いえ、二ノ宮さんでしたか…」
聞こえた声に対して反射的に下の名前で呼びそうになったが、要はすぐに昨日の事を思い出して言い直した。
要の反応に少しだけ不快感を露わにしたが、すぐに彼女は表情を戻して要の横に腰を下ろした。
「…こんな朝早くに出会うとは思っていませんでした」
「それは時間を考えれば当然のことだ。朝五時に起きて訓練するなんて余程の馬鹿か酔狂な人間でなければ考えもしないだろう」
「…ちなみに自分と二ノ宮さんは？」
「お前は単なる馬鹿だな。朝三時から一人で剣を振り続ける武人なんてどれだけ名のある英傑でも居ないだろう」
「そうでしょうね、何時から見ていたのかは気になりますが…ところで二ノ宮さ…」
「それに関して少し話がある」
尋ねようとしたところを椛に遮られた。
「まず最初に言っておくと、その丁寧語は止めてくれ」

「…ですが…」
否定しようと要が口を開こうとすると、鋭い視線で制された。
「親しき仲にも礼儀ありとはよく言うが、礼も過ぎれば無礼になる…それだけ言えば要も分かってくれるだろう？」
「…諒解、だ」
「うむ…それでいい」
返答に満足したのか、椛は少しだけ頬を緩めた。
「それで…椛はどうしてこんな早朝からこんなところにいるのかを聞きたいのだが…」
「……それは…だな…」
要がもう一度尋ねると、椛はあからさまに視線をさまよわせながら自身の長い黒髪をいじった。落ち着きを失っていることは要の目には明らかだったが、その理由が彼には全くわからなかった。
数秒の間はそんな調子が続いていたが、意を決したのか椛は一つだけ深呼吸をして真っ直ぐに要の目を見た。
「昨日の事を謝ろうと思って…な」
「…昨日というと…あの醜態を見せたところか？」
「醜態と言うな！」
要の答えに突如怒りに声を震わせながら椛は要の胸倉をつかんだ。
「…椛？」
「お前はあの場面を、自身が傷つくだけで済まそうとしたのだろう！　他の誰かを…それこそ要にあれほどの暴言を吐いた女子すらも庇って…一切傷付けることなく済まそうとしたのだろう！」
要は何も言えなかった。
椛の気迫が凄まじい、というのも一つの理由ではあるだろうが、その指摘が完全に的を射ていたからでもあった。
「あれから落ち着いて…冷静に考えてみれば要の考えそうな事だった…それなのに、そんな自分の行いを自分でも否定してどうするつもりだ！？」
最後の方は涙混じりの訴えだった。

「誰にも知られない善行を自分で貶すな！　それでは…あまりにも要が不憫…すぎる…」
「…悪かった…」
嗚咽混じりの泣き声を上げる椛を落ち着かせるように、要は静かに頭を撫でた。
指先に触れる椛の髪は絹のように、細く滑らかだった。
…二人が最後に別れた五年前もそうだったのだ。
要の祖父の都合で彼女の住んでいた土地から離れる際、泣きながら別れを惜しむ椛を宥めるために色々考えた結果が頭を撫でると言うものだった。
そこでいくつかの言葉をやり取りした記憶はあるのだが、肝心の内容は一切思い出せず、少しもどかしい思いをしながらも、要は今目の前で涙を流している彼女を落ち着かせる事に集中した。
しばらくしてようやく椛が落ち着きを取り戻すと、急に恥ずかしくなったのか、少し距離を空けて二人は座っていた。
「それで話は戻るが…要にぶつけてきた今までの暴言は無かったことにして欲しい」
「……」
「自分でも勝手だと言うことは分かっているが…折角こうして一緒の学園生活になったというのに、喧嘩を続けているのも気分が悪いと思って…な」
「……」
要が転入してから一ヶ月間、昨日のようなことは決して少なくなく、そのたびに椛は要に対して
「勿論、要が嫌だと言えば私も無理は言わない…ただ、今までの事だけは謝っておこうと…」
「椛は相変わらず自己完結する悪い癖があるな」
今まで押し黙っていた要は突如努めて明るい声でそう言った。
心細げに下をむいていた椛はその言葉で顔を上げた。
「俺は一度たりとも椛を拒絶していない。あれ以降丁寧語で話して

いたのは椛を不快にさせないようにと俺が勝手に空回りした結果だ」
「いや、しかし…！」
「だから、これで今までの事は互いに無かったことにする」
否定しようとする椛を手で制して、要はそう断言した。
「俺は椛にみっともない場面を見せた。椛は俺に少し乱暴な言葉をぶつけた…それで互いのことは水に流そう。そして、今日からまたよろしく頼む」
そう言って静かに手を差し出した。
椛もおずおずと手を差し出して握手をしたが、ようやく吹っ切れたのか表情を柔らかくして微笑んだ。
「あぁ、任された！」
二人の間にあった大きな壁は、一ヶ月という時間をかけてようやく壊された。
しばらくして二人は手を離して互いに空を見上げていた。
「しかし、このままでは要は鈗甲を扱えない、ということでまだまだ謂れのない誹謗中傷が…」
《主、修練はもう終わったのだろうか？》
今まで空気を読んでいたのではないかというようなタイミングで影継が木陰から現れた。
突然の正体不明の声に椛は慌てて立ち上がろうとするが、要が安心させるように声をかけると警戒心を少しだけ緩めながら腰を下ろした。
《ふむ…そちらの女子はこの学園の神樂だろうか？》
「そうだ……椛は初めてだろうから紹介しておく。これが俺の鈗甲となった神州千衛門影継だ」
《以後見知りおきを》
「に、二ノ宮椛だ…よろしく頼む…」
《むぅ…やはり我の姿は女子（おなご）に対してあまり良い印象を与えないようだな？》
「いや、椛の場合はただ単に突然声をかけたから驚いただけだと思

うが…」
《そうなのか？》
確認するように影継は椛の方へと顔を向けた。まだ驚きが治まっていないのか、椛は少しだけ詰まらせながらも丁寧に答えた。
「あ、あぁ…これでも虫は大丈夫な方だが…さすがに誰も居ないと思っていたところに声をかけられるのは慣れていないので…」
《承知。以後気をつけるとしよう》
反省したのか影継は素直に頷いて椛に近づいた。
《しかし見たところかなりの神技を扱う神樂と見たが…主の奥方なのか？》
その発言に椛は思わず咳き込んでしまった。
変な呼吸をしてしまったためか、やたら高い咳をしており、しばらく会話をすることは困難なように見えた。
「…影継。悪いが俺と椛はそんな関係ではない」
《左様か…未だにこの時代の価値観…特に貞操概念には慣れん…齢十四で結納が普通だと思っていたのだが…》
「時代による価値観の違いが露骨に現れたな…まぁそれは追々慣れていけば大丈夫だろう」
「ま、待て、要！　どうして、ケホッ…そんなに落ち着いていケホッ…いる！　それに…」
「今は無理矢理話そうとするな。背中をさすってやるから落ち着いてから話せ…」
「う…す、すまん…」
そうしてしばらく要が背中をさすって、ようやく普通の呼吸に戻ったのは五分後だった。
「よし、大丈夫みたいだな…」
「あ、あぁ…」
少し椛の顔が赤いことが少し要の気がかりだったが、指摘するとなんでもないと露骨に触れられることを拒否されたのでそのことに関しては黙っておくことにした。

「それで…見たところこちらの釼甲…影継でよかったか？…は相当な業物だが…一体昨日の今日で何が…」
「…それは…」
要は『影継』に関しては一切隠すことなく椛に打ち明けた。
「…それは本当のことなのか？」
「一応全て事実だ。未だに自分でも信じきれていない部分はあるが…」
《胸を張れ、主、二ノ宮嬢も寝耳に水をかけるような話かもしれないが、紛うことなく事実だ》
「…しかし…」
《数物の釼甲がどうだかは知らぬが、業物の釼甲が主・仕手と呼ぶのは、我らの全てをあずけるに値する唯一の人間であり、その者のために全力を尽くす事こそ釼甲の誉れ。生半可な覚悟で呼んでいる訳ではない、ということを理解していただきたい》
「……」
影継の誠意の篭った言葉が椛に届いたのか、しばらくの沈黙が続いた。
今まで一切釼甲を扱えない男として罵られていたのに、突如素人目に見ても分かる業物の仕手となったというのは、ほとんど前例のないことだった。
驚くのは無理も無い話だが、幸い椛は凡人とは異なり理解のある女子だった。
「わかった。改めてよろしく頼む。神州千衛門影継」
《影継で良い》
「なら私も椛と呼んでくれ。さすがに殿を付けられるほど偉くなった覚えはないので…加えて出来ればその口調ももう少し砕いてくれると助かるな」
《承知した…が、話し方に関しては申し訳ないがこれで勘弁していただきたい…如何せんこれを変えるとなると一旦全て分解されなければならんので…》

先程まで淡々と話していた鍬形の釼甲が急に怯えたような口調になったのが面白かったのか、椛は口元を抑えて笑った。

幼馴染との今までより少しだけ穏やかな日常が、静かに始まった。

二人目の編入生《壱》

「おはようございます、要さんに二ノ宮さん！」
学園の校舎に向かっている最中、校門で相変わらずのメイド服で生徒に挨拶をしていたアンジェに三人は捕まった。
「おはよう。アンジェは相変わらず元気だな…」
「そして変わらないメイド服…か…」
「はい、それがアンジェの魅力でございますので！」
「元気なのもメイド服なのも良いが俺のことを忘れてないか？　俺だけ名前を呼ばれなかったんだが？」
要と椛の後ろで龍一がアンジェに尋ねると、彼女は思い出したように手を叩いて口を開いた。
「要さんの彼氏さんですね！」
「「断じて違う！」」
アンジェのボケに対して男二人は容赦無く否定した。
息がぴったり合ったコンビネーションは女子二人を笑わせるには充分な威力だったようで、椛とアンジェは顔を背けて笑っていた。
「よし、アンジェのボケは今日も問題なしだな！」
「はい！　毎朝このやりとりのために、アンジェは日々掃除係の方々や食堂の皆様のご意見を参考にしていますので！」
「その努力をもう少し英語に回してくれると教えている身としては助かるのだが…」
少しだけ呆れたように要がつぶやくとアンジェは慌てて謝った。
「もも申し訳ありません、要さん！　しかし英語だけはどうしてもチンプンカンプンでございまして！」
「自分の生まれ育った故郷の言語が分からないというのも珍しい話だな…」
アンジェリーク・真白・スプリングスノー。
名前通りの白い肌と髪を持ち、自身がプリースト（大和における

神樂）でないのにも関わらず、その人当たりの良さで誰とでも交友関係を持てる人懐っこい少女である。
大英帝国で生まれ育ち、天領学園の入学式に合わせてこの学園で『主無し』のメイドとして働き出している。
家のことについてはあまり語らない為、何故わざわざ大和にまで訪れているのかは一切不明だが、判明している理由のひとつとしては『自分が仕えたい主を探している』ということだ。
そんな要の疑問は露知らず、アンジェは焦りながらも必死に言葉を探している様子だった。
「そ…そもそも英語は文法がアンジェには複雑すぎるのでございます！　過去形は分かっても過去分詞なんてどんな時に使えばよろしいのか全く分からないのでございます！」
「…それは、まぁ否定はしないが…それでもアンジェは大和語が流暢だろう。それこそそこらで言葉を乱している生徒よりは、な」
「好きこそものの上手なれ！　でございますので！」
「……興味の持ちかた、ということか…」
豊満な胸を張りつつ自信満々に答えるアンジェに、今後の勉強法を考え、頭を押さえている要。要の苦労性が垣間見えた。
話を聞いて思い出したのか、椛は話題を変えて尋ねてきた。
「そういえば噂に聞いたことがあるのだが…アンジェは要に授業の内容を教えてもらっている、というのは本当か？」
「はい！　要先生のおかげで三ヶ月分の授業を一ヶ月で受けさせて頂いているのでございます！　残念ながら昨日は少々用事があって受けることはできませんでしたが…」
「だから先生と呼ぶのは勘弁してくれと…」
「済まない…本来ならば私が教えていてもよかったはずなのだが…」
「でも教育用記憶媒体は本人以外閲覧禁止だったから、結局二ノ宮ではアンジェに教えられなかったぞ？」
「…そうなのか？」
「意外と二ノ宮は話を聴かないタイプか…記憶媒体は他にも模倣不

可にしてたりと、案外セキュリティが厳しいんだ。だから要がノートを取っていた、と言えばわかるか？」
「……そこまで深い考えがあったわけではないのだが…」
「いや、その間で要が否定していないことがよくわかった…済まない、私がもっとアンジェに気をかけてやれれば…」
「いいえ、椛さんが気に病む必要はございません。それにアンジェは合法的に男子寮に入ることができて、更には本当なら受けられない授業を受けられて、毎日がワクワクでございます！」
そう…本来ならば学園生…もしくは留学生ということで入学していた筈らしいが、英帝語の試験が壊滅的であった事と神技を扱えないということを理由に不合格になってしまってはいたが、佐々木の特別措置のおかげで『学園で奉仕する』ことと『教師から指導を受けない』という条件付きではあるが学園で学ぶことを許されている。
と言っても、冒頭で要が暴力を振るわれていたように、この世界は、決して力無き人間に甘くはない。それこそ男では武人の素質が無いだけで、女は神楽の素質が無いだけで暗黙の了解的に差別の対象になる。
力ある者は踏みにじる。
力無き者は蹂躙される。
それでもアンジェが今日まで無事に過ごしてこられたのは自身の社交性の高さによるものだが、要がこの学園に転入するまでは誰一人として彼女に教えようとするものは居なかった。
教えれば、役たたずに手を差しのべる同類だと看なされるからだ。
大衆を取るか、個人を取るかで尋ねられれば、恐らく大半は大衆に見捨てられることを恐れて個人を捨てるだろう。
凡人とは、常にそういう存在である。
どんな時代でも、どんな世界でも、それだけは不動の理である。
幸い、要は凡人で有りすぎた故に、既に大衆に見放されていたため、彼女と接触することは何の抵抗もなかった。

そして、彼女が学びたいという意志を示せばすぐにそれに応じるように講義内容を事細かに記述し、彼女の時間がある時に自分の時間を削って指導していたのだった。
「しかし時間があったからとはいえ、三倍の密度で講義内容を教えたのは少し厳しかったか…？　飲み込みが速いからついペースを上げてしまったが…」
「全然問題ありません！　むしろアンジェはバッチ来いでございます！」
「それなら良かったが…」
「しかし残念ながらそんなアンジェちゃんに悲しいお知らせがあります」
意気込むアンジェに対して龍一が少し俯き加減に口を開いた。
「な…何かあったのでございましょうか？」
あまりの龍一の真剣さ…に、アンジェは息を飲む。
焦らすように間を空けて、ようやく口を開いた。
「なんと、アンジェちゃんの努力のせいで、アンジェちゃんはもうすぐ俺たちの講義に追い付いてしまいます！」
「な、何ということでございましょうか！？」
大げさに腕を広げながら告げられた言葉に衝撃を受けたアンジェは本気で落ち込んでしまっていた。
「そ、そんな…それではこれからアンジェは今までのような濃密な夜は過ごせないのでしょうか！？」
「誤解を招くような言い回しは止めてくれ、アンジェ。そして龍一も変なふうに煽るな、椛も、だ。龍一の発言の半分は冗談だと思うぐらいで無ければ持たないぞ？」
「いや～アンジェちゃんがどんな反応をするかが気になってつい…」
「ののの…のう…濃密！？」
今にも膝をつきそうなアンジェに対して、龍一は特に悪びれた様子もなく笑っていた。傍から聞いていた椛は少し顔を赤くして言葉を失っていた。要の声は届いていない様子だった。

周囲は何事かと少しだけ野次馬が出来かけたが、その原因が要だと知るとすぐに興味を失ったように去っていった。
「アンジェ、確かに龍一が話したことは事実だが、アンジェが望めば他の雑学知識や指導要領外の内容をやっても俺は全く構わないのだが…」
「ほ、本当でございますか！？」
急に元気が出たのか、アンジェは勢い良く顔を上げた。
その表情はいつもより明るく、非常に嬉しそうな満面の笑顔だった。
「あぁ本当だ。と言っても俺の得意分野…物理学と国史、世界史の雑学程度しか教えられないが…」
「いえ、全く問題ありません！　むしろ先程も仰ったようにアンジェはバッチ来いなので！」
「よし、それならまずは英語と露帝語を今までの五倍に…」
「我侭で申し訳ありませんが…出来れば語学を外していただけると嬉しいのですが…」
「安心しろ、冗談だ」
「もう…要さんは時々意地悪でございます」
少しすねたように頬を膨らませながら、そんなことをつぶやいたが、それもすぐにもとに戻った。
「それでは、ここで長々とお話していると、皆様が講義に遅れてしまうので、アンジェは失礼させていただきます！」
「…と、そんな時間か…それじゃあ要、俺は先に行っているぞ！」
「私も早朝から佐々木教諭に目を付けられたくないのでもう行くぞ」
椛と龍一はそう言ってすぐに校舎に向かって駆け出していった。
それに遅れないように駆け出そうとしたところで、要はアンジェに制服の裾を引っ張られていた。何かと思って振り返れば、少しだけ真面目な表情をしたアンジェが真っ直ぐに見つめていた。
「要さん、昨日アンジェがお預かりした女の子でございますが…」
「…そうだ、あれから何か問題でもあったのか？」

「いえ、それはもうぐっすりとお休みになって、今朝も健康的に五時に起きておりましたが…出来れば昨日何があったのかを詳しくお話していただけると…」
「……」
昨日、要があの場面に遭遇されたとき、アンジェに話したことは『やましいことは何もしていない』ということに集中しすぎていたために、肝心の御影については詳しく話さなかったのだ。
さすがに協力してもらっている以上、無関係とは言い切れなくなっているので、要はアンジェにも起こったことを話す決心をした。
「分かった。ただ、今は時間が無いから、今日の昼休みにでも昼食を取りながら話そう…椛と龍一にもそのことは話さないといけないような気がするからな…」
「分かりました！　それでは皆さんの分のお食事はアンジェがご用意致しますので、手ブラで屋上にてお待ちいただくようお伝えしていただけますか？」
「分かった。二人に追いついたらすぐにでも伝えておこう」
それだけ伝えると、時間が迫ってきたことに焦ったのか、要はすぐに駆け出していった。
「それでは、要さん…」
要に振り返る余裕はなかったが、それでもアンジェが姿勢を正していることは、一ヶ月の短い付き合いではあるが、よくわかっていた。
最後の登校者に、アンジェは深々と頭を下げて声を高らかにした。
「行ってらっしゃいませ！」

二人目の編入生《弐》

「……予想は出来たはずだ。対策も充分に練られたはずだ」
講義開始十分前。
五十嵐要は珍しく頭を抱えて机に肘を立てていた。
「……要に何かあったのか？」
「いや、俺は知らないな？　さっき佐々木教諭が『あの女の子』を連れて入ってきてからこんな感じで…」
様子のおかしい要を、椛と龍一が気にかけるも、二人の声は要に届いていなかった。
要は目だけでその『女の子』の方を見た。
「それでは、少し時期としては微妙になりますが…転入生を紹介したいと思います」
要にとって見覚えのある、赤味のかかった黒髪と、昨日まで自分が持っていた髪留めを揺らしながら教壇に立つ少女。
少し低めな身長に対して、大人顔負けの体の凸凹。
学園の制服はサイズが小さいのではないかと疑ってしまうほど胸囲が主張しており、長いスカートを左足だけ『全て』覗けるほどの切り込みが入れられていた。
男子陣はその美貌にざわめき立っており、女子陣は親の仇を見るような視線で彼女を睨んでいた。本人は一切感じ取った様子は無い。
何かを探すように辺りを見回しているが、要と視線が合うと微笑みを浮かべた。
「おい、もしかして今俺の方に向かって笑わなかったか？」
「馬鹿、お前じゃなくて俺だろう、常識的に考えて」
「体は小さいけれど、出るところは出ている…行ける！」
案の定要の前後の男子は自分のことだと思って勝手な口論を小声で繰り広げていた。
わざわざ止める気も起こらず、仕方なしに顔を上げると突如隣か

ら身も震えるような殺気が立っていることに要は気が付いた。
　気配の元である右隣に視線を向ければ、鋭い眼光で椛が要を睨んでいた。
「要」
「…なんだろうか？」
「私の勘違いでなければあの女子はお前を見て微笑んだように見えたのだが…知り合いか？」
　有無を言わせぬその気迫に押されて、要は慎重に言葉を選びながら口を開いた。
「知り合いと言えば知り合い…だが」
「…？　珍しくはっきりしないな？　それとも何？　要が隠していた彼女？」
「！？」
　龍一が煽ると要ではなく椛が反応し、的確に要のつま先を容赦無く踏み付けた。
「～～～～…！」
　痛みによって声にならない声を上げながらも、姿勢・表情をほとんど変えない要は見事というべきか、他の生徒に一切気取られることはなかった。
「…何をするんだ、椛」
「ふん！」
　若干痛みに声を震わしながらも、何事もなかったように椛に問いかける要であったが、彼女は謝る気が無いのか、視線を前に戻してしまった。
「それでは…自己紹介をお願いします」
「分かりました」
　佐々木に促されると、素直に従って前へ出た。
「おはようございます。今日から皆さんと一緒にこの学び舎で学んでいくことになりました、綾里御影です。不慣れなことも多いですが、よろしくお願いします」

丁寧に頭を下げると、それに何故か感激した男子は喝采を浴びせた。
御影は少し困ったように笑いながらそれに応えた。
「それで御影さんの席になりますが…基本は自由なのであい…」
「それじゃあ、要の隣でお願いします」
その一言で教室内の空気が一気に変わった。
「…要…って誰だっけ？」
「知らないわよ、私の知り合いにはそんな名前の人はいないし…」
「指名された奴…男だったら…」
そんな空気を無視するかのごとく、御影は目的の場所まで真っ直ぐに歩いてきた。
御影と要の距離が一歩一歩近づくに連れて、椛の殺気が膨れ上がっていき、要の目の前に到着した頃には周囲の生徒が無意識的に怯え出す始末だった。
悠然と立つ御影に対して、椛は敵意丸出しに睨んで威嚇していた。
睨み合う二人を見て要は自分の胃がキリキリと痛み出すのがよくわかった。
原因が分かっても対処法のないものほど厄介なものはなく、痛みで顔を少し歪ませながら、要は行先を見守るしか為す術は無かった。
「えっと…要の隣に座りたいから、二人の内どちらかが動いてくれると助かるんだけど？」
「普通なら空いている席で十分だろう？　何故わざわざ既に座っている人間を動かしてまで要の隣に座ろうとする？」
「見知らぬ人が多い中に身を置くくらいなら、知り合いの隣に座ろうとするのは普通のことじゃないかしら？」
「だとしても、だ。空いている席は要の後ろにもあるのだから、そちらに座れば良いだろう、綾里とやら？」
「…要、お前あんな美人とどこで知り合ったんだ？」
「…昼には話す。少し長くなりそうだから、な…」
終わりの見えない口論に頭と胃を押さえながら、何とか要は龍一

の問いに答えた。
　そんな要の苦労を知らず、二人は己をぶつけ合う。
「そんな狭量な事を言っているから所々が大きくならないんじゃないかしら？　特に胸とか…」
「貴様の物が規格外なだけだ。私だって一般人以上…Ｄはある！」
「…でぃ…？　よく分からないわね。それって私の三十寸（凡そ９０ｃｍ）より大きいのかしら？」
「待て待て待て…　二人とも勢いでとんでもないことを暴露しているぞ？」
「……え？」
　要の声で椛がようやく周囲に目を向けてみれば、全員様子がおかしかった。
　何故か前かがみになっていたり、鼻息を荒くし始めたり、要に恨みの篭った視線を送る男子陣。
　対して自らの『もの』を見下ろして嘆息したり、この世が絶対的に不公平だということを突き付けられて絶望して机に突っ伏す女子陣。
「～～～～～…！！？」
　それを見て、ようやく自分が何を言ったのかを理解した椛は顔を鬼灯のように赤くした。
　反対に御影は大して気に留めた様子もなく、平然と椛を退かそうと四苦八苦していた。
「ん～～～…　どうすれば退かせるかしら…」
「あの、綾里…さんだっけ？　俺が後ろの席に移るから、あんたはこの席を使ってくれ。見ていてあまりにも二ノ宮が不憫だ…」
「悪い、龍一…」
「まぁ、気にするな。…っと、いう訳で失礼するぜ」
　席を退いた龍一は机を飛び越えて、これから隣になるクラスメイトに軽く挨拶をしてから、要の後ろの席に座った。
「今日から隣だ、よろしくな」

「え、あ、はぁ…？」
明るく挨拶をした龍一に対して両側の二人は驚きで開いた口が塞がらない様子だった。
高低差一メートルはあろう段差＋机を助走なしで飛び越えたことに、龍一の隣に座っている男女は驚きを隠せなかったようで、視線を彼と彼が先程までいた場所を往復させていた。
身体能力に関して言えば同学年で龍一と肩を並べられる人間はいない、と言われているのも二人は知っていたが、いざ目の前で見せつけられると驚きもあるが、それよりも信じられない、といった感情の方が大きかった。
だが周囲に同意を求めようとしても、他の生徒の意識は御影と椛の方にむいているので、二人は何も言えずに黙ってしまった。
それはさて置き、空いた席に御影は躊躇うことなく座り、要に軽く微笑んで前をむいた。
「…御影の名字は綾里だったのか？」
「いいえ？　無いと不自由するからって佐々木教諭に言われたから適当に思い当たった名前を取ってつけただけよ。私の鍛治場があった村の名前ね」
「…成程」
要はその答えで静かに頷いて彼女同様前に向き直った。
一部始終を見ていた佐々木はようやく話が纏まったと分かると、時間を確認して教壇に立った。
「それでは、個人的な質問は休み時間にお願いして、講義を始めたいと思います」
どこか疲れたような、昨日より覇気のない声によって一日が始まった。

二人目の編入生《参》

雲ひとつない空に浮かぶ太陽は容赦無く屋上にいる六人と二領を照らしていた。
その場にいる人間は五十嵐要、二ノ宮椛、アンジェリーク・真白・スプリングスノー、獅童龍一、首藤遥、綾里御影という順番で輪になっていた。
円から少し離れた、龍一の後方には相州五郎入道正宗が。
その中心には神州千衛門影継が落ち着き払って周囲の人間を見渡した。
《貴殿達が主の御学友か？》
「朝に一回会っているが改めて…二ノ宮椛だ」
「名前が長いのでアンジェは気軽にアンジェとお呼びくださいませ！」
「…遥…首藤、遥…よろしく…」
「他のクラス…で良かったわよね？　の人は初めまして。今日からこの学園に通うようになった御影よ」
《名乗りが遅れて申し訳無い。我は神州千衛門影継と申す》
全員が自己紹介を終えて、最初に声を上げたのはアンジェだった。
「は～…　こちらが要さんの鈡甲でございますか～…　格好から鍬形虫でよろしいのでしょうか？」
《…主、此方（こちら）の珍妙な意匠を纏う女子は如何なる者であろうか？》
「あ。アンジェはこの学園で仮メイドを務めさせていただいております。影継さんの時代では…女中のようなものだと思っていただければ…」
要が答える前にアンジェが影継の疑問に応えた。
《…成程、諒解した…しかし、仮…ということは主を持たない、という解釈で宜しいだろうか？》
「はい。こちらでご主人様になる御方を探しております」

《ふむ。我も四百年待って要殿のような良き主を持てたのだ。貴殿も主の学友なら良き主人に巡り会えるだろう》
「あはは、気長に待ってみます」
楽しそうに話すアンジェを横目に遥は御影に話しかけた。
「…これが、さっき話していた…貴方の作った…釼甲？」
「えぇ。自分でもかなりの傑作だと自負しているわ」
「…確かに、ここまで人間らしい反応をする、ということも驚き…」
遥の驚きも仕方の無いことだった。
主流となっている数物釼甲の人工知能は精々仕手の命令を『その通り』実行することであり、自主的に行動することは不可能だと言われている程だった。
現在様々な研究機関が、更に人間に近い人工知能を開発しているが、どうしても鋳造してしまえば自己判断機能が大幅に低下するという問題に頭を悩ませている。
そういう意味で、初めて見る業物釼甲の『人間らしさ』に遥は驚いていたのだった。
「…だけど、私が…一番驚いたのは…」
遥は、今度は反対側に座る龍一に視線を移した。
言いたいことが分かったのであろう龍一は目が泳いでいた。
「……龍君が釼甲を…それも、大和の人なら誰でも知ってるような…正宗の仕手だった、のが…」
「えっと…弁解の余地は…」
「…無い…」
許しを乞おうとしている龍一に対して遥は容赦がなかった。
拗ねたように顔を逸らして、遥は自分の弁当へと手を付け始めた。
相変わらずの大きさに初見の御影は驚いていたようで、思わず小さい体の遥とその手にある巨大な物の間に視線を往復させた。内心は恐らく「こんな体の小さい子が？」だろう。
《黙っていて悪かったな、嬢ちゃん！》
「…ううん。悪いのは…龍君だから」

「完全に俺だけ悪役か…まぁ仕方がないっちゃ仕方がないな…」
諦めたように嘆息しながら龍一は自分の膝元に置かれた弁当に口をつけた。
「お、旨いな、この玉子焼き…」
素直な感想を呟くも誰も答えることはなかった。
変わったことと言えば、龍一に背を向けた遥が少しだけ顔を綻ばせていた事だけだった。
アンジェが用意した弁当は四つで要、御影、椛、龍一に配られる予定だったが、先述通り龍一の分は遥が用意したので、余った弁当は自身で食べている。
「それで、要…今朝のことについて詳しく話してもらおうか？」
「あら、あたしと要が仲の良い知り合い…」
「済まない御影。ややこしくなるから黙っていてくれ、この出汁巻き昆布をやるから…」
「はい、ありがとう」
御影がそれ以上言う前に要は彼女の弁当の空きにさっきあったものを素早く乗せた。
それを見た御影は満足そうに昆布に手を付けた。
御影の注意が逸れている間に昨日のことを、簡略に必要なことだけを話すと、椛は半信半疑といった風に眉を顰めた。
「…仕手がいない剱甲が装甲状態で数百年？　その中に綾里が…？
とてもではないが信じられないな…」
「…と言われても、誇張は一切ないから信じてくれ、としか言いようがない…それでも駄目なら佐々木教諭に聞いてくれ。あの人も気絶はしたがその場に居合わせ…」
「…いや、信じよう」
要が言い切る前に、椛はそう言った。
「…今、何を…」
予想外の反応に要は驚いて思わず聞き返してしまった。
「要がそうまで言うのだから事実なのだろう。昔から嘘が嫌いな要

が、こんなことで嘘をいうとは思えないからな」
「…助かる」
「私としては、綾里が私の知らない間に作った…その…か、彼女…などで無いだけで充分だ」
「……いや、俺には彼女どころか女友達すらまともに居ないぞ？」
自分の交友関係に軽く悲しみを覚えながらも要は椛、御影と遥を見た。
…彼女達を含めて付き合いのあるもしくはあった女子は四人。
龍一のような親しみやすい性格ではないので、要にとって今はこれが限界だった。
あまりの少なさに自分に対して情けなさを感じざるを得なかったが…
「う～ん…でも要は見た目整っている方だし、少し態度が硬いけどそれは芯が通っているという意味では女子に好かれても可笑しくはないわよ？」
「非常に喜ばしいことではあるが、正直まだいらない…というのが今の感想だな」
「ぐ…」
「？　どうかしたか、椛？　喉に詰まらせでもしたか？」
小さなうめき声を聞き逃さず、要は椛の方へとむいた。
「い、いや、何でもない…！」
「ふふふふふ…」
椛の反応に、御影が楽しそうに笑っていたが、その一方で要は御影と椛の関係が拗れる事を危惧していた。
「…ところで、御影さんが影継に相応しい武人さんを見るために鈡甲に宿っていた、ということは分かったのですが…どうしてそこまでしようと思ったのでしょうか？」
影継とのじゃれ合いに満足したのか、アンジェが三人に割って入ってきた。
「造った人間独特の疑問…といったところかしらね。一応装甲解除

は相応しい人間にしか出来ないように設定したけど、それ以降影継の力に気を大きくして悪用する可能性も零とは言い切れなかったから、ね」
「…えっと…折角美味しく見栄え良く出来たお料理を、毒を盛るために利用される…という感じでしょうか？」
「…非常にアンジェらしい例えだな」
「申し訳ございません、アンジェは皆さんほど賢い頭は持っていないので…」
そう言ってアンジェは恥ずかしそうに笑った。
「そう言われれば確かに気にするのも仕方無い話だな。事実『救世主（メシア）』の武人による『死の行軍（デスマーチ）』でどれだけの人が殺されたことか…」
椛は忌々しげに呟いた。
その単語が出た瞬間、要だけではなく食事に集中していた龍一も、誰にも僅かに反応をした。
二人の反応に誰も気付くことなく、女子たちの会話は続いていた。
「…『救世主』？　それによる『死の行軍』？　…全く聞いたことがないのだけれど…」
「…『救世主』は、力によって世界を本来あるべき姿に戻そうとする組織……『死の行軍』は、世界各国で『救世主』が起こした戦い…と言っても、攻撃したのは戦う力を一切持たない人ばかり…どちらかと言えば、殺戮事件…」
遥も話していて気分の良いものではないのだろう、俯き加減にそれらを説明していった。
「二年前に鷺沼という町で、突然の宣戦布告…生存者は鷺沼市全住人の五％にも満たない…百三十人…」
「大和政府の発表ですと、国衛軍中隊が駆けつけてようやくそれだけ助けることが出来た、という事でございましたね…世界各地で起こった『死の行軍』では唯一軍隊が間に合い、生存者有り、の戦い…事件だったとアンジェはお聞きしています」
さすがのアンジェも重々しい雰囲気を察したのか、明るい雰囲気

など微塵も感じさせない、悲しい表情をしていた。
「大和生まれのお母様も、この知らせを聞いた時は、ご友人が生存しているという知らせが来るまで部屋に籠って泣いておりました。お父様もかなり心を痛めておりました…」
「…そう、か」
アンジェの言葉に要は重々しく口を開き、それだけ呟いた。
つぶやきには悲しみ、後悔、そして僅かだが、何故か喜びの色も混じっているようだった。
数秒ほど沈黙が続くと、話題を変えようと椛が思い出したように要に問い掛けた。
「そ、そういえば、要！　源内師範と千尋さんは元気にしているか？！」
「源内？　千尋？」
突然表れた名前に御影は首をかしげた。
「要のお祖父さんとお姉さんだ。子供の頃に何度かお世話になった人たちなのだが…」
「……」
「？　ど、どうかしたのか、要？」
努めて明るく話す椛に対して、要は非常に困った表情を浮かべていた。
御影は昨日の食堂での会話を思い出して、その質問がとてつもない爆弾だということに気が付き、それを止めようとしたが、それよりも先に要がゆっくりと衝撃の事実を告げた。
「…源内の爺さんは少し前に息を引き取って、姉さんは行方不明になっている…」
「……えっ？」
淡々と告げられる事実に椛は思考が追い付かなかった。
「何が有ったか、については出来れば聴かないでくれると助かる。正直自分の中でも整理しきれていない部分が多くて、な…」
「う、あ、す、済まない……」

「いや、謝らないでくれ。このことを話した人はほとんどいないのだから、椛が知らないのも当然だ」
泣いて謝ろうとする椛を手で制して、要は少しだけ表情を和らげた。
「椛の方は、おじさんやおばさんともう喧嘩はしていないよな？椛が爺さんから剣術を習おうとしておばさんと大喧嘩したのが今でもよく覚えている…」
「そ、そんな昔のことを今ここで言うな！」
「え、二ノ宮は剣術を習っていたのか？」
意外そうな表情をしながら龍一が会話に混じってきた。
既に昼食は食べ終わったのか、元通りになるよう袋で包んでいるところだった。
「そうでございましたか！　椛さんは運動神経が良いので何かやっていたのではないかと思っていましたが…まさか剣術とは！」
「あ、いや、ほ、本当に少しかじった程度だ。自慢できるほどでは…」
「…でも、椛さんは…一回武人科の人相手に勝ってた…」
「お？　遥は二ノ宮の腕を知っているのか？」
「しゅ、首藤！？　それは…！」
慌てて止めに入ろうとする椛であるが、距離が離れているために何もできなかった。
「…私が武人科の人…二人に絡まれたとき…間に入って、返り討ちにしてくれた…」
「よし、遥。その生徒の特徴を教えてくれ。今すぐ遥に手を出そうとしたことを後悔させてくる」
《お、掃除の時間か？》
「止めろ龍一。正宗に手を掛けるな、殺しに行くつもりか。そして正宗も楽しみにするな」
笑顔で憤る龍一を何とか押さえつけて落ち着かせるが、それにかなりの時間を要し、そうこうしているうちに時間もそろそろ昼休み

が終わるという頃合いになっていた。
「っと…そろそろ戻らないと間に合わなくなるな」
「あ、もう残り十分になっておりますね…では食べ終わったお弁当箱は全てアンジェが預からせてもらいます」
「あぁ、ご馳走様でした」
「ご馳走様、美味しかったわよ」
「あぁ、しかしアンジェは本当に料理が上手いな」
「いえいえ、椛さんのお料理も美味しいですよ。ですが、お言葉は有難く受け取らせていただきます」
「…アンジェさん、昨日は、ありがとう…」
「はい、はっちゃんもよろしゅうございました！」
「……うん」
女子陣は会話に花を咲かせながら素早く屋上を去っていった。
残されたのは男二人に二領の鈔甲。
「…俺は時々女子の団結力の凄さを思い知らされるよ。今だって時間を言っただけで揃って片付けていっただろ？」
《何時(いつ)の時代の女子も変わらぬものなのだと我も理解した》
《しかし仲良き事は良きことかな、だろ？》
「まぁ、上手く行くならそれで良し…だ」
心配の種だった二人は何とか上手く行きそうな事を感じて、要は満足そうに笑った。
「さて、俺たちもさっさと降りるとしますか。さすがに長い時間陽に当たりすぎて首が熱い…」
《承知》
《諒解っと》
龍一の声を合図に、屋上に留まろうとする者は居なくなった。

模擬戦闘『乙竜　対　丙竜』《壱》

光陵学園の大訓練場は別名『決闘場』と呼ばれる。
広大な学園の土地の内三分の一を占めており、国内でそれ以上の規模を持つ訓練場は恐らく大和国衛軍の総合火力演習場とかつて大戦場となって現在もその状態を維持されている関ヶ原位だろう。
五限開始から十五分。生徒一同が見下ろす先には二領の鈒甲が今にも太刀打ちしようとしていた。
「要、お前は乙竜と丙竜どちらが勝つと思う？」
要の後方から頭を出して龍一が尋ねてきた。
要はその質問をされてから一度決闘場にたつ二人の武人を見て、少しだけ考えたがすぐに答えが出た。
「…始まってもいないことを尋ねられても…と言いたいが、俺は乙竜…たしか風紀委員が装甲しているほうだと予想するな」
「成程、意見が違えば明日の昼食を賭けようと思ったが…残念同じか…」
軽く残念そうに後ろ頭で手を組んで仰け反った。
「要と獅童は始まる前にわかるのか？　それに丙竜のほうが最新型の鈒甲だろう？」
「はー…あれが大和鈒甲の乙竜と丙竜でございますか～。実物を見るのは初めてなので、アンジェにはどっちがどっちなのか…」
隣で少し緊張した面持ちをした椛が二人に問い掛けた。その隣に座っているアンジェは初めて見る二領の鈒甲に感心した様子だった。
椛の質問は鈒甲を詳しく知らない人間なら至極当然のものだ。
大和国衛軍制式採用鈒甲、二代乙竜と三代丙竜。
初代機に甲竜があり、全てが数物の鈒甲である。
それぞれに特徴があり、どれが優れている、とは断言できないが、現在鈒甲での戦闘は多数を相手にできる事を重要視されているために丙竜のほうが他の鈒甲より鋳造されているのは事実だ。

更に言えば、丙竜は最も改良される事が多く、ここ数年でかなり重武装になっている。
「…近接攻撃に特化した甲竜、遠近両用ではあるが特に目立った特徴がない乙竜、そして近接攻撃は申し訳程度に備え付けられた脇差のみという遠距離特化型の丙竜ということは知っているな？」
「あぁ。それに、丙乙甲の順で戦場での戦績が良い、ということも知っている」
「…うん、間違ってはいない。間違っていないけど…」
傍から聞いていた龍一はどう説明しようかを悩んでいた。
基本的な性能は代を重ねるごとに強くなっている、というのが数値上のものである。そのため素人では後継機である丙竜が有利と考えるのが普通である。
男二人は決闘場の中央に視線を移して続ける。
「それはあくまで『多対多』の状況下に置いての話だ。群れと群れをぶつけ合う現代合戦戦法をとる場合は遠距離で攻撃できる丙竜は非常に大きな戦力だが、白兵戦に置いてはむしろその遠距離で攻撃出来るという利点が欠点になりかねない」
「…それは…なぜだ？」
「丙竜に備え付けられているのは先程要が言ったとおり、脇差一振りと連発式機関銃（ガトリング）と肩部駆動式砲台（ショルダーカノン）…対して乙竜には太刀、脇差と遠距離攻撃には短機関銃（サブマシンガン）…混戦状態になれば丙竜の重火器はとてつもない驚異だが、一対一の白兵戦では小回りが重要になるから、比較的軽装備である乙竜の方が有利なんだ」
「他にも判断材料はあるが…まぁこれは言わないほうが良さそうだ」
そう言って要は獅童の右の席に視線を移した。
「本当にお願いしますよ、五十嵐君に獅童君…私の講義を先取りしないでくださいといつもお願いしているでしょう？」
いつから居たのだろうか、獅童の横で佐々木がため息まじりで呟いていた。
「分かっています」

「あら、先生は何時の間に？」
「五十嵐君と獅童君が説明を始めた辺り…ですね。相変わらず二人相手に教えるのが嫌になるほど説明上手で…」
御影が不思議そうに尋ねると、佐々木は躊躇うことなく応えた。
苦笑いしながらも佐々木は真っ直ぐに戦いの場となる場所を見つめた。
「補足をしますと鈒甲は地上を走るよりも空を飛火で飛んだほうが遥かに速いので、基本の戦いは空中戦になります…性能は数値の上では確かに丙竜のほうが勝っていますが、火力に重点を置いたがために自身の装備による重量で、速力の点で言えば乙竜の方が勝っています」
「…それで、白兵戦では乙竜のほうが有利、ということですか？」
「それもありますが他にも判断理由は…そうですね、実際に見たほうが早いでしょうね。ほら始まりますよ？」
佐々木が指を指した決闘場では既に一合太刀打ちし合い、それを合図に二領の鈒甲が同時に空へと駆けた。先行しているのは装備が軽い乙竜の武人であり、丙竜の武人はそれを追うように騎行していた。
互いの飛火の火力から、どちらも速力全開で騎行していることが椛にも分かった。
「…性能が数値だけでは判断できない、というのは本当だったのですね…」
「戦いは様々な要素が絡んでくるために、一点から見るだけでは分からない事の方が多いのですよ。複数の視点を組み合わせて、ようやく朧気な実像が現れる…これは神樂の方にも当てはまるので覚えておいてくださいね…と、丙竜が機関銃を出しましたね」
後行の丙竜は取り出した物で先をゆく鈒甲に狙いを定めて引き金を引いた。
次の瞬間、絶え間無い破裂音が空に響き渡り、鋼の塊が先行する乙竜に容赦無く襲いかかった。

だが、敵の仕手もそのことは想定内だったのだろう、右へ左へと揺れることで機関銃の標準を合わせないようにし、弾丸を避け続けた。多少の被弾はあったが、どれも騎行に重度の障害を与えないような部位ばかりだった。
「…あの弾丸の雨を、あれだけの動作で避けるなんて…それも後方を確認せず！？」
「武人の男子の腕もあるのでしょうが…どちらかと言えば彼をサポートしている神樂によるところが大きいですね」
驚きの声を上げる椛は今にも立ち上がりそうな勢いだったが、それを要が抑えた。
そんな様子に気付きながらも佐々木は静かに説明を続ける。
「乙竜の仕手の名前は知りませんが、その神樂はこの学園の風紀委員長で、神技の使い方に関しては一級品です…それに加えて、かなり精確かつ迅速なサポートが彼の実力を十二分に発揮させています」
「…神樂は神技を出せば良いのではなかったのですね…」
「それが分かっていただければ今日は十分です。どうしても戦闘中は死角の状況確認がしにくくなりますので、全域を視認できる神樂のサポートは必須になります」
「…そういう意味ではアンジェあたりが最適な気もするが…」
「気を配ることには自信がありますが、神技の無いアンジェでは足でまといになるのが目に見えます…」
申し訳無いという表情をしながら、アンジェは律儀に答えていた。
鈒甲による戦闘にかなり興味があるのだろうが要によって話題に出されたことで、先程まで釘付けになっていた視線を、無理矢理はがしてまで答えた。
「…ところでスプリングスノーさんは五十嵐君から学園の講義内容を教わっていましたね…調子はどうですか？」
「はい！　毎晩の授業が楽しくて仕方がありません！」
「そうですか。せめて私の講義でも受けさせることが出来ればよかったのですが…残念ながら他の石頭共の反対意見が多くて…」

「…佐々木教諭、今なら無理して皮を被らなくてもいいんじゃ…？」
「…そうだな、さすがに四六時中この話し方は疲れるから…と」
龍一が指摘するとすぐに佐々木は姿勢と口調を崩した。
教服のポケットに入れていたタバコの箱から一本だけ引き抜いて、流れるような動作で口にくわえて火を点けた。
佐々木のその姿を見慣れぬ女子陣は少し驚いた様子だった。椛とアンジェは思わず顔を見合わせ、二人の意見を代弁するように御影が尋ねた。
「そっちが本当の顔、ということかしら？」
「正解。要と龍一は知ってるから大丈夫だが…二ノ宮とスプリングスノーは驚いただろう？」
悪戯に成功した子供のような表情をしながら、佐々木は煙を吐いた。
「……随分と鬱憤が溜まっているようだな。いつもならタバコは吸わなかったと思うが…」
「そりゃあ、一日で鈔甲・影継の仕手発見の報告書十枚、御影の編入試験を全部自分で作って手続きしてって…一本ぐらい本人たちの前で吸っても罰は当たらないだろ？」
「そりゃそうか…ってもしかして他の教科の試験問題も作ったのか、教諭？」
「だから石頭共と言ったんだ。ほとんど全員揃って、あるはずの暇を定時だなんやらで拒否して…手を貸してくれたのが大英帝国語のウィルソン教諭だけって…」
「「…すいませんでした」」
原因となった二人は潔く頭を下げた。
さすがにそれだけの苦労を知って何も言わないほど人間が出来ていない訳ではないので、二人は揃って佐々木に向かって謝った。
「まぁ、見たところ全て上手くいっているようだから、二人に関しては気にしなくて良いぞ。それよりも御影は英語もそこそこの点数をとっていたことに驚いたが…」

「西洋釼甲について調べるために自然覚えていただけね。お陰様で文章を書く問題はさっぱりだったでしょう？」
「成程、言われてみれば確かにそうだったな」
「…アンジェ、四百年以上前の人間のほうが自国語を良く知っていることについてどう思う？」
「お恥ずかしい限りでございますね…」
「という訳で、今日から英語にも力をいれて教えよう」
「お、お手柔らかにお願いします…あ、要さん、少し状況が変わりました」
その声に従ってアンジェの指差す方を見てみれば、丙竜が少しおかしな動きをしていた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5704z/

装甲護神　影継

2012年1月14日20時55分発行